

2004(平成16)年
4月2日発行

第38号

沖縄国際大学図書館

沖縄県宜野湾市宜野湾二丁目6番1号
〒901-2701

TEL (098) 892-1111(代) 内線2102・2104

FAX (098) 893-3274・0019



沖縄国際大学図書館報

目次

※図書館は「アラジンのランプ」ー人間の三つの喜びー 法学部教授 垣花豊順	1～2
※アメリカの図書館 法学部教授 佐藤 学	3
※図書館という港 経済学部講師 源河葉子	4
※情報と図書館 産業情報学部助教授 平良直之	5
※図書館と私 総合文化学部講師 西原幹子	6
※図書館を利用して 図書館をしよう 総合文化学部講師 吉田肇吾	7
図書館のイメージ 法学部法学科4年次 大城綾乃	8
図書館でディスカバ 商経学部経済学科3年次 平良年康	8
この図書館は動いている 総合文化学部日本文化学科4年次 鈴木潤三	8
※キーワードは「理想」 仕事と大学院の両立 法学研究科 法律学専攻2年次 上原香代子	9
研究、仲間との交流 地域文化研究科 人間福祉専攻2年次 仲原 都	10
※図書紹介『君たちはどう生きるか』 総合文化学部教授 森田満夫	11
※学科長が新入生に薦める5冊(種類)の本	12
※資料収集は論文作成の要です！ ーNACSIS-IRと研究紀要ポータルの紹介ー	13～14
※図書館利用オリエンテーション	15
※文献検索ガイダンス実施 ー大学院生、学部学生3年次以上対象ー	15
※平成15年度 論文・エッセイ	16
※放送が禁止された歌 総合文化学部日本文化学科3年次 伊佐常利	17～20
※『夏の花』ー平和への祈りの根付きー 総合文化学部日本文化学科1年次 小野智子	21～24
※図書館を利用して 岩田ゼミ、6つのテーマ発表 総合文化学部講師 岩田直子	24
※嘉数津子様から特別寄付金受入	25
※平成15年度私立大学等研究設備整備費等補助金交付決定	25
※西日本図書館学会から本学図書館表彰	25
※平成15年度寄贈図書(個人)	25
※夏休み・春休みー高校生への図書館利用サービス開始ー	26
※坂出祥伸教授から道教関係法具寄贈される	26
※カイロ大学副学長ら、図書館視察	26
※平成15年度図書館見学・視察一覧	26
※平成14年度図書館統計	27
※平成14年度図書館利用状況	28
※図書館短信/新図書館長プロフィール/人の動き	29
※図書委員会の動向	30
※編集後記 図書館の3年を振り返って 前図書館次長 山根光正	30



図書館は「アラジンのランプ」

—人間の三つの喜び—



法学部教授 垣花豊順

沖縄国際大学に入学された新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教員の一人として心から歓迎し、お祝い申し上げます。

人生には大きく分けて三つの喜びがある、といわれています。それは、乳幼児のころ他人から精神的・物的施しを受ける「貰う喜び」であり、皆さんのような若人が自助努力して自己に内在する精神的・肉体的力を引き出して「自己の潜在能力を実現する喜び」であり、私のような熟・老年者が年輪で力を蓄え、身内の妻子だけでなく、太陽の熱・光のように社会を照らし、他者に尽くす「奉仕の喜び」であります。

産声としてオギャーと歓声をあげてこの世に生まれた赤ちゃんは、慈しむ母親に抱かれておっぱいを呑み、おもちゃを貰うことで至福の微笑みをします。この微笑は、人生を明るく積極的に生きる人格形成の基と言われています。不幸にして微笑む機会に恵まれなかった赤ちゃんは喜怒哀楽のバランスのとれた人格を形成することが難しい、と言われています（周囲の働きかけにより可能ではある）。胎内にいるときは、見えざる神のように生命を育む母親と臍の緒で結ばれて生かされ、子宮内を全宇宙と思っていました。文字通り、胎児のお宮である子宮内で満ち足りた10月10日の人生を終え、見えざる力に押されてこの世に生まれてみると、生命を与えてくれた両親、血の繋がりのある兄弟・姉妹や祖父母の顔があり、頭上には万物を育む太陽が輝き、地上には四季を彩る草木が繁茂し、空には自然の美しさをたたえ、生きる喜びを唄う小鳥が飛んでいます。我が家の家財道具をみると、発展途上の国々の家庭には見られないテレビ、ラジオ、冷蔵庫等の電気製品が配置され、先人は人類の歴史で蓄積した「知・情・意」「真・善・美」等に関する情報をコンパクトな形と塊にして大学や街の図書館・博物館で蓄えています。

皆さんは図書館に行くと、この世の仕組み、ルール、健康・幸福の条件、ものの考え方、一人の人間として歩むべき道等を勉学することのできる恵まれた環境にあります。そのことに気付くことは大事なことです。

皆さんは母親からおっぱい、周囲の方々からおもちゃを貰って至福の乳幼児期を過ごしたことでありましょう。入学の喜びを噛みしめると同時に、是非とも過去を振り返って見てください。過去を振り返ることは、個人、社会、国家の未来を開拓する礎になるからです。今回の入学の喜びは、周囲の方々の励ましと自分の努力で自己に内在する精神的・肉体的能力(知・情・意)の一部を引き出し

た結果であることに気付くことでしょう。この自己実現の喜びは、沖縄国際大学で勉学する4年間に更に拡大・深化され、卒業後は社会を照らす大きな喜びへと連動することでしょう。大学の教員・職員一同は、全力を尽くして皆さんを手助けします。

宇宙に一人しかいない自己の尊厳に目覚め、自己実現に努めると、人は孤独では生きることが、成長することもできないことに気付きます。人は生きするためには、食事を摂らなければなりません。食事の原料、例えば読谷村の紅芋は、種芋が地中



に根を張って水分、その他の栄養分を吸収し、芋づるの葉にある葉緑素で太陽の熱・光を受けて光合成作用により、独特の風味のある芋を生産しています。その際、芋づるは動物の吐き出す二酸化炭素を栄養源として吸収し、動物が呼吸するのに必要な酸素を吐き出します。そのことを別の視点から説明すると、この地球を構成する土や石の鉱物は天に輝く太陽の熱・光の力を受けて草や木の植物を育て、植物は人間や野生の動物を育て、動物は生命を終えると鉱物、植物に恩返しをするかのように、土や石になって植物を育て、永続的に相互依存、循環、共生しています。「雨ニモ負ケズ」の詩で知られる宮沢賢治は個人が成長して幸福になるための要件について「全ての生物はみな無量の劫(カルパ)の昔から流転に流転を重ねてきた。…だから我々のまわりの生物はみな永い間の親子兄弟である」「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」「正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに依拠して行くことである」、とのメッセージを著作で送り続けています。賢治のメッセージは自然科学上の真理です。ケプラーは「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる」(旧約聖書詩篇19章1)を研究の指針にして、規則正しく移動する夜空の星を観測し、ついに惑星運動に関する三つの法則を

発見しました。その三つの法則とは、（1）すべての惑星は太陽を一つの焦点とする楕円軌道を運行する、（2）惑星と太陽を結ぶ動経は同一時間内に等しい面積を描く、（3）惑星軌道の長半径（太陽－惑星間の平均距離）の三乗は公転周期の二乗に比例する、ということです。この発見によって、人々は宇宙には数学的な緻密な秩序があって、各惑星は互いに調和を保ちながら運行していることを知りました。この知見に基づいて、現代の自然科学者は人工衛星を空に飛ばし、月面着陸と火星の探査を行っています。自然界を永続的に統御する秩序は、いわば神の定めた法律です。社会学者は万物を永続的に生かす自然界の秩序の意味を探究し、政治、経済、法律等の制定、運用の指針にすべきだ、と考えられます。

私にとって図書館は「アラジンのランプ」のように貧乏な若者を富める者に、悩む者に希望を、不幸な人を三つの喜びに導く学園の中心です。図書館は先に述べた天と地に関する知識を深め、己を発見し、自他の調和について学び、三つの喜びを味わうことに関する資料を整えています。沖縄国際大学の図書館は施設・設備、館長をはじめ職員のサービスに関する熱意は全国でもトップレベルです。皆さんは沖縄国際大学で勉学することに誇りを持ってください。

明治憲法は天皇を現人神と定め、教育勅語は個人の潜在的な能力を伸ばすことよりも、天皇と国家に忠誠を誓う人材の育成を定めていました。そのような歴史的背景もあって、日本人は御上に弱く、権力になびき、時流に流される傾向が強い、と言われています。現行の日本国憲法13条前段は根本理念として「すべて国民は、個人として尊重される。」、と定め、24条は家族生活における個人の尊厳・両性の平等を定めています。憲法制定時の日本政府代表は、これらの条文の制定に強く反対しました。憲法24条の草案を策定したベアテ・シロタ・ゴードンは著書『1945年のクリスマス』で日本人について次のように述べています。

「日本人というのは、本質的に封建民族だと私は思う。権力者の命令ならば、たとえ気が進まなくとも実行する(中略)。日本人に人権という概念を話しても通じない。わがままとか、個人主義とかいう悪意のあることばに置きかえられてしまうからだ。」

ゴードンの日本人観を裏付けるかのように、元総理大臣の森喜朗は座右の銘として「滅私奉公」を掲げ、個人を尊重する戦後の教育は失敗だとの観点から憲法・教育基本法の改正を強力に推し進めています。私は保護司として23年間少年院や刑務所から仮出獄した人々の生活指導をしています。保護司として気付いたことは、非行少年が増え、学校が荒れているのは教育基本法が悪いのではなく、その理念を具体的に実行しないことの方が問題だ

ということです。そのような視点から『教育の根本理念は個人の尊厳である』とのタイトルで本を出版しました。己に誇りを持ち、自分の心と体を大切にすることは、他人が尊厳な存在であることを認め、権力に媚びず、自ら奢らず、高ぶらず、弱者に対しても公平に謙虚に接します。そして、インドのガンジー、アメリカのキング牧師、憲政の神様といわれる尾崎行雄のように人々の心と社会を明るくするために、精力的に働きます。個の尊厳に目覚めた学生は、日常生活では、駐車違反をしないように法規を守り、大学祭で酒類を販売するようなことはしません。

憲法・教育基本法の改正の問題は、皆さんだけでなく、日本の将来を大きく変える重要な問題です。図書館で憲法・教育基本法の制定過程、改正の目的、問題点等について、じっくり勉強し、静かに考えて下さい。図書館はアラジンのランプのように、皆さんに新しい知識と知恵を提供します。

去った2月22日は朝から大雨でした。第三者から見ると馬鹿げたことですが、私はおきなわマラソンに参加するために五時に起きて食事をとり、準備を整え、泡瀬にある総合グラウンドに行きました。雨は止まないのゴミ袋に穴を開けて頭から被り、九時にスタートしました。過去に完走したことはあるが、加齢と共に体力が衰え(私は1933年7月生まれ)、完走の自信はありませんでした。案じていた通り30キロ付近になると、足は重くなり、気分も悪くなりました。しかし、スポーツの盛んな沖縄国際大学の教壇に立つ教員として安易にリタイアはできないと肝に銘じ、最後の10キロは電柱を目印に歩いたり走ったりして、なんとか完走しました。タイムは5時間55分48秒で4690位でした。「たかがマラソン、されどマラソン」です。私はジョギングで体を鍛え、図書館を活用して教壇に立つつもりです。沖縄国際大学に入学した皆さんが恵まれた大学の図書館、運動場を多に利用して自己に潜在する力を開発し、三つの喜びを味わうことをお祈りいたします。



伴ネットメンバー（目の不自由な人々とジョギングを楽しむ筆者）の練習風景 於：漫湖公園・2003年12月



アメリカの図書館

法学部教授 佐藤 学

アメリカ留学生活中に「ピッツバーグ大学ヒルマン図書館」で過ごした時間は、一体どれほどの長さになるのだろうか。85年に大学院に入った当初は、毎週、気の遠くなるほど数多くの専門雑誌論文や書籍を課題に指定された。まだ読む速度が遅かったので、ひたすら図書館にこもって、それらを読み、ノートを取った。90年代前半には、学位論文の調査で、連邦議会議事録や、経済紙（マイクロフィルム）を読むことに専念していた。

ピッツバーグ大学は、大した大学ではないのだが、本部図書館の蔵書数は300万冊を数え、通常必要な本は手に入った。大学図書館は、全米に点在している「寄託図書館」として、政府の公文書が備えられ、そのおかげで地方都市に住みながら、首都ワシントンに行かずとも、連邦議会の議事録を使った研究が可能だったのである。

90年代を通じて、大学図書館に大きな変化が生じた。まず、検索システムが導入され、蔵書カードが廃棄された。蔵書カードの廃棄は、当時議論をまき起こした。カードからデータベースへの変換作業において、たとえ0.1%の誤差でも、300万冊ある本のうち3000冊が行方不明になってしまう。また、カードは、司書からの、本や利用者へのメッセージである、という情動的な声もあった。しかし、たくさん並んでいたカードボックスは、いつの間にか消え、カード自体も廃棄されてしまった。検索システムは、みるみるうちに利便性を増し、今ではカードを使って本を探していたことが嘘のようである。もちろん、早い時期にインターネットに接続された。<http://www.library.pitt.edu/>

検索システムの導入と並行して起きたのが、読書用の机がPCやMacのデスクに置き換えられていったことである。開架式の書架の脇に、多くの個人用読書席ボックス（キャレルと呼ばれる）が並んでおり、勉強する際にはそこに本を積み上げて取組んだ。そのキャレルが、ほとんどなくなってしまい、コンピュータに取って代わられた。今では申し訳程度の机が残されているのみである。自前のコンピュータが持てない学生にとっては有難

いし、コンピュータ室だけでは不足する分を、普段授業に使うわけではない図書館に入れるのも、仕方がなかっただろう。しかし、キャレルが無くなっていった時期は、図書館で本を読む学生の姿が消えていく時期でもあった。

留学4年目から学部科目を教えていたので、学生のレポートの変化に気が付いた。使う資料に、インターネット上のものが入り出したのが93-4年。以後、レポートはもっぱらインターネット上の資料の切り貼りになり、学生達は本を使わなくなっていった。

今思うと、キャレルをなくしたことは、図書館にとっての自殺行為だったのではないだろうか。コンピュータがこれだけ安価になれば、共用のものを設置する意義は低下した。確かにインターネットは便利なもので、十年以上前に、あれだけの時間をかけて検索し読んだ連邦議会議事録を、今では沖縄にいて、より効率的に読むことが出来る。しかし、書籍の価値は今も変わらない。インターネットだけで学問が成り立つという幻想に、学生達がとらわれないことを願う。



ピッツバーグ大学ヒルマン図書館



図書館という港

経済学部講師 源 河 葉 子

次から次へと課される論文を仕上げるために、私は連日深夜まで図書館に入り浸っていた。米国ヴァージニア州にあるジョージ・メイソン大学図書館の閉館時間は深夜2時だった。利用当初は、そんなに遅くまで開いていて便利なものだ、と感動していたが、アメリカではごく普通のことらしい。それどころか、1日24時間開館している図書館もあると聞き、論文の締切りが迫ってきたときは、とても羨ましく思ったものだ。

ものを調べて文章にまとめる作業は、新しい航路を求めて大海原へと漕ぎ出す旅のようなものだ。用意した海図が正しくなければ、めざす大陸に辿りつけない。そして、冒険者にとって図書館は、航海の途中に立ち寄る港町のようなものだ。大勢の人が行き来する港町のなかでも、冒険者はすぐに見分けがつく。顔つきでわかる。遠い目をしているのだ。髪をピンクに染め鼻ピアスをした女の子だって、腰までの髪をうしろで一つに束ねたジーンズ姿のおじさんだって、冒険者の頭の中はこれからの航海のことで一杯なのだ。

ところで、学術書でも小説でも、読んでいる間はその内容について考えている。それなのに、なぜまた、わざわざ「考える」ために書かなければならないのだろう。留学最初の頃、知りたいことはそれこそ膨大で、自分で下手な文章を書くよりも、その時間を使って優れた文献をひとつでも多く読み了えたかった。初年度のゼミを担当していたジェイコブズ教授にこの疑問をぶつけてみた。彼は予想外の質問に驚いたようだったが、丁寧に答えてくれた。「人が、書かずにどうやって考えるのか、正直いって私にはわからない。」それは、とてももの静かな、ゆっくりとした言い方だった。独り言のようにも聞こえた。

あの一言を聞いた日から5年近くが経った。この間、結局私は数百ページの論文をまとめるために、のべ数千ページの草稿を書くことになった。うち3年の留学期間中は、ほとんど毎日、大学図書館で文献を調べ、コンピュータ・ラボで課題を執筆し、カフェテリアでコーヒーを飲みながら書

いたものに手をいれ、また図書館に戻って調べ物をした。同じことを何度もくりかえし、そして書いた。友人や指導教官に、自分では気がつかない間違いや分かりにくい部分を指摘してもらい、さらに書き直した。パソコンのキーボードに指をおき、何時間も画面の文字をみつめながら、ひとつの文章さえ紡げないこともあった。夜の大海原で、陸も星も見えずに途方にくれる気分だった。そんなときは、また図書館へ向かった。自分の言いたいことを的確にあらわす言葉を探すために、何冊、ときには何十冊もの本を参照した。水先案内人を書物の中に求めた。

うまく思いが綴れないとき、それは考えが混乱しているか、わかったつもりで実は全くわかっていないときだった。書くことで、冒険者は旅の海図に自分の考えが辿った航路を記し、これからの進路をしっかりと見定める。おそらく、ジェイコブズ教授が言いたかったのはこのことだったのだろう。

論文が完成して、ひとつの航海がおわる。新しい航路の発見を目指して意気揚々と臨んだ航海なのに、成果といえば、それまで海図にのっていなかった小さなサンゴ礁をみつけた、というようなささやかなものだったこともある。反省も多い。それでも、一つの航海を乗り切ったという小さな満足感を胸に、冒険者は再び大学図書館へと向かう。新しい航海への誘惑にかられて。



留学中、大学図書館のほか、米国国立公文書館（写真）、議会図書館など多くの資料機関のお世話になりました。



情報と図書館

産業情報学部助教授 平 良 直 之

「情報」という言葉を聞くと、皆さんはどのような事をイメージするでしょうか？短絡的に「コンピュータ」とイメージする方もいるかもしれませんが。広辞苑によると情報とは、判断を下したり行動を起こしたりするために必要な知識、と示されています。インターネットの普及は膨大な情報をもたらし、コンピュータ技術の進歩は様々な種類の情報を我々の目的に合致した形態へ加工することを可能としました。つまり、何を目的とし、膨大な情報の中から必要なものをどう選択し、どのように処理を施していくのが大切であり、インターネットやコンピュータはこれらを効率的に行うための道具にすぎないと私は考えています。もちろん、非常に高性能な道具ではありますが。

一方、近年の情報通信技術の進展による社会変革の流れを受け、沖縄でもマルチメディアアイランド構想が策定されました。ここでは、既存産業の情報化、新規産業創出の推進による自立的発展、産業の活性化・集積等が重要なテーマとして取り上げられ、地域産業分野を活性化、または新規企業を創造できる人材の育成が急務となっています。このような地域人材ニーズを踏まえ、本学でも産業情報学部が2004年度に開設されました。

産業情報学部は企業システム学科と産業情報学科で構成されています。企業システム学科では、企業活動全般を対象とし、企業の意思決定に必要な知識や技術と企業を取り巻く経済的な環境を中心に理解を深めることを主目的にしており、「企業経営における高度な経営情報分析能力、国際的ビジネス感覚を持ったビジネスの専門家」の育成を目指しています。

産業情報学科では、まず、経済社会の基本的な仕組みと情報について学び、私たちの社会が如何に情報と深く結びついているかの理解を深めます。次に、企業や産業の発展・創出を理解するために、企業及び産業の知識と合わせて、情報の整理・分析方法、コンピュータ技術の活用について学びます。産業情報学科では、あらゆる産業分野において情報化を推進する「産業の情報化」と、情報を

基に企業や産業の発展・創出を図る「情報の産業化」を担う人材の育成を目指しています。

さて、図書館についてですが、これは情報を提供する施設であると言えます。本学の図書館は、書籍が約32万冊、新聞・雑誌が約2,200種類、ビデオ・CDが約7,000点も所蔵されており、また所蔵書籍を効率的に利用できるシステムも備えた、非常に充実した施設であると思います。

インターネットも情報収集の場としての側面を持ちますが、双方とも一長一短があります。例えば、最新情報の収集という目的であればインターネットに分がありますが、現在までの情報収集を目的とするなら図書館に分があると私は思います。つまり、インターネット上の個々の情報は断片的なものであることが多く、事象全体を理解しようとする、やはり図書館に所蔵されている書籍も利用すべきでしょう。図書館の膨大な数の書籍の中から必要な資料を探すのは大変な作業ですが、その反面、目当ての資料を見つけると非常にうれしいものです。インターネットだけでなく、図書館にもっと目を向けてみてはいかがでしょうか。きっと、新たな世界に出会えると思います。先ほども述べましたが、何が目的で、必要な情報をどう選択し、どのように処理を施していくのが大切だと私は考えています。情報を幅広く収集し有効に活用してこそ、新たな知見が創造されるのですから。



図書館システムの利用風景



図書館と私

総合文化学部講師 西原 幹子

図書館特有の空気というものがある。私は図書館より自宅で読書をするタイプなのだが、それでも、あの空気の中で読書をしたくなって、図書館に足を運ぶことがある。図書館には非日常的で刺激的な何かが確かにある。では「図書館的空気」の淵源はどこにあるのだろうか。

村上春樹の短編に「図書館奇譚」という作品があるが、図書館がシンとしているのは本が音を吸い取るからだ、というような台詞からはじまる。主人公は図書館の地下にある迷路に迷い込み、さらにその奥の長い階段を降りた末に閉じ込められ、脳みそを吸い取られそうになる。荒唐無稽なストーリーだが、知識の森の奥へ分け入っていくときの恐怖と魅惑をうまく描いているような気がする。図書館は、想像と現実の境界領域へと導かれる入口のような場所なのかもしれない。しかし私にとっての「図書館的空気」とは、暗い地下室の孤独なイメージとは少し異なるものだ。

何より、図書館の空気とは、その空間を共有する人々によって作られるのだと思う。ひとつの空間として見た場合、私にとって好ましい図書館の条件とは、図書館員の人々が親切であり、天井が高く、広いガラス窓で囲まれ、閲覧室での他人との距離がちょうどいい具合に保たれていることである。近所の市立図書館に行くと、子供をあやしながら本を探す主婦や、自習机を占拠する制服姿の高校生集団や、度の強い眼鏡に手を当てて丹念に新聞を読む老紳士の姿などが見受けられる。時折むずかる幼児の鳴き声が高い天井に響いて、沈黙を破ったりする。異なる年齢層の人々が各々の

知的欲求を抱いて図書館に集まり、各々の生活の一部をその表情にのぞかせている。

一方大学図書館では、まちの図書館に比べれば、やや切迫した表情が多く見られる。辞書や資料の山をストイックな表情でさばいている学生や、石化したように頬杖をついたままの学生、つぶしていた頭をむっくりと上げて目をしばたかせている寝不足らしき学生などがまばらに席を占めている。地下書庫に行けば古書のにおいが充満して、時間の流れも淀んでいるかのように思われる。薄暗い書庫で自分の他に誰もいないと思っていると、突然すぐ耳元で「はらり」とページをめくる音がして、薄気味悪くなったりする。

図書館に足を踏み入れると、私は一人になった気持ちになる。その一方で、周りには見知らぬ赤の他人がいて、その一人一人が、それぞれの想像の世界を広げて、そこに埋没している。お互いの世界は交わることはないが、その場所を共有しているという感覚はある。ときに棚から取り出した本のページをめくっていて、ふりがなや下線が書き込まれていたりすると、見知らぬ誰かの痕跡が私の読書に介入してくる。本の裏表紙を開き、貸し出し用シートに記されている日付を何となく眺め、自分は何番目なのかを確かめたりする。他人がどんな夢を見ているのかを知ることは不可能だが、図書館に行くと、ちらりとその影を見ることができるよう気がする。うまく言えないが、一人でありながらそうではないという感覚、それが「図書館的空気」の源を成しているのではないだろうか。



料金を払って読む

公立図書館ができる以前、人々は料金を払って私立図書館から本を借りなければならなかった。18世紀には紳士用図書館、19世紀には会員制図書館もあった。

『ビジュアル博物館第48巻 文字と書物』
(同朋舎出版) より

図書館を

新学期、新入生の皆さんは希望に胸を膨らませていることでしょう。れないようにしてください。図書館には約32万冊の図書が常備されている新聞も用意されています。AVリソースコーナーには、ビデオ、レーンできます。また、パソコンを使つてのレポート作成やインターネットから



図書館を利用しよう

総合文化学部講師 吉田 肇 吾

私たちが生活している情報社会は、今後さらに「いつでもどこからでも」必要な情報源にアクセスでき、ますます個人の情報収集能力が求められるようになっていきます。

図書館は、私たちにとって一生利用できる社会施設であり、知と情報の宝庫です。そして、この図書館にはさまざまな「図書館サービス」があり、必要に応じて各種サービスを受けることができるのです。在学中に図書館利用の知識と技能を身につけ、情報社会を生き抜くことのできる「情報探索の達人」の基礎能力を養ってください。

本学図書館は、地上4階、地下2階の建物です。そして、現在約32万冊の一般・専門図書、2200種類を超える学術雑誌や7000点以上の視聴覚資料を所蔵しています。これらの資料や施設を効果的に利用するためには、まず「館内のどこに何があるのか」、また「どのような図書館サービスを受けられるのか」をきちんと把握しましょう。新入生を対象とした「図書館利用オリエンテーション」もありますので、図書館の職員から館内案内と具体的な説明を受けてください。また本学図書館のホームページも参考にしてください。

館内資料の利用は、資料名と保管場所がわかっていればすぐに利用できます。しかし、大学生活ではレポートや論文作成などで「参考となる資料にはどのようなものがあるか」のように、自分自身で必要な資料・情報を探すことから始めなければならないことがあります。その場合には、次のような情報手段を使用して情報を収集をしましょう。（本学図書館ホームページ内の「資料の探し方」参照）

- ①参考図書類(辞書・事典、便覧、年鑑、書誌、目録、索引など)による調査
- ②CD/DVD、オンライン・データベースによる情報収集

③インターネットによる情報収集(図書館ホームページ内の「リンク集」参照)

④OPAC(Online Public Access Catalog)による本学図書館の蔵書検索：所蔵の有無

さらに「資料の探し方や参考図書の使い方がわからない」などのような時は、『レファレンスサービス』という図書館サービスを利用しましょう。利用したい資料が貸出し中であれば『予約』を、本学図書館が所蔵していなければ、『図書館間相互協力』を利用できます。図書館に備えて欲しい図書があれば『リクエスト』もできます。このような図書館サービスを利用したい時は、カウンターの職員に詳しく聞いてください。また「機器類の操作方法がわからない」ような場合にも、サポートをしてくれます。

館内にはいろいろなコーナーもあります。1階入口右側の「ブラウジングコーナー」には、新聞や雑誌があります。2階には「郷土関係資料室」があり、県内でも充実した郷土資料を備えています。3階の「AVリソースコーナー」では、CD・ビデオ・DVDなどが視聴でき、またパソコンでワープロやインターネットなどを使用することもできます。読書のほか、レポート・論文作成でももちろんですが、勉強に疲れたときのリフレッシュのためにも利用してください。

なお図書館を利用する場合は、お互いに基本的マナーを守ることを心がけましょう。



利用して

在学生の皆さんも現状に慣れることなく、常にフレッシュな気持ちを忘れます。その中には約20000冊の郷土資料も含まれています。県内、国内ザードディスク、CDなどの視聴覚資料が常備されています。名画も鑑賞の情報検索も可能です。図書館を利用し、学生生活を充実させましょう。

図書館のイメージ

法学部法学科4年次 大城 綾乃



皆さん、図書館は好きですか？よく利用していますか？

私は図書館がこれまでは苦手でした。本はもともと好きなので図書館を利用していたのですが、図書館にいとなぜか落ち着きがなくなり、本を借りるとすぐに退館してしまうのが常でした。また、宿題やレポートを出されて図書館で資料を探しても家に帰って仕上げようと思ひ勉強することはありませんでした。きっと私の中で図書館は敷居が高いものだと感じて緊張していたのだと思います。そのため図書館を有効利用することはできませんでした。

しかし、本学の図書館に出会って図書館のイメージが変わりました。一般・専門図書が豊富なだけでなく、雑誌や

パソコン、ビデオ・LDなどAVリソースコーナーがとても充実しているからです。逆に今では図書館に親近感が芽生え、よく利用しています。講義の空き時間を使って、友達とビデオを見たり、インターネットで情報を収集したりして、大学生活をエンジョイする場となっています。また、テスト前やゼミなどみんなで集まって勉強するときもよく図書館のグループ学習室を利用しています。図書館は静かにしないといけない場所ですが、このように討論もできる場所もあるので作業がとてはかどります。学生のニーズに合わせた素敵で快適な図書館です。苦手だった図書館が今では大学生活に欠かせない一部になっています。

このように、これまでは大学生活を充実・エンジョイするための場として利用していましたが、これからは就職に向けた資格試験や就職活動の勉強のために利用しようと思っています。本学の図書館はいろいろな形で活用することができます。皆さんも自分なりの利用の仕方を見つけることをお勧めします。きっと楽しい大学生活を送るための場所になると思います。

図書館でディスカバ

商経学部経済学科3年次 平良 年康



「図書館は利用しづらい」と思ったことはありませんか？私も本学の図書館を利用するまではそうでした。今までの私はあまり本を読むことがなく、図書館とは無縁の存在でした。高校のころは全くといっていいほど図書館を利用しませんでした。それに図書館利用者＝「がり勉」という堅いイメージをもっていました。

平成14年に沖縄国際大学へ入学した私は高校同様、入学当初は図書館を利用することはありませんでした。ある日、母から「五体不満足」という本を薦められ読んでみると、とてもすばらしくて感動しました。筆者の声がストレートに私の心の中に入ってくる感じがしました。それから私は本を読みたいと思い大学の図書館を利用してみることにし

ました。図書館の中へ入ると、高校の図書館とは比べようもないほど広く、本の数も豊富で、これには私自身驚きました。さらに驚いたことは、図書館で映画を観ることができということです。今までの図書館に対するイメージが完全に覆された感じがした。あの日以来、私は毎日といっていいほど大学図書館を利用しています。

本学図書館の最大の良さは自習机が多く完備されているところです。大学の講義は長く、講義の中で全て理解することは困難なことで、私は一日の講義が終わると図書館の自習室へいき講義で習ったことを自習するようにしています。

今では図書館は私にとってなくてはならない場所となり、講義がない日でも図書館へいき自習したり、本を読んだり、映画を観たりしています。

新入生のみなさん、これから始まる学生生活を有意義にするためにも図書館を利用しましょう。自分にない何かを発見できるはずです。図書館がみなさんの発展の場となるよう大いに利用し、学生生活をエンジョイして下さい。

この図書館は動いている

総合文化学部日本文化学科4年次 鈴木 潤三



私は、この図書館は常に進化していると感じます。県内のどの大学よりも優れた設備を備えているのは確かです。豊富な蔵書、パソコン、AVホール、スタジオ、グループ学習室に休憩室、まして喫煙室のある図書館など聞いたこともありません。

しかし、それ以上に図書館職員の皆さんの凄さです。常により良いサービスを考える姿勢を持ち、要望があった場合はもちろんのこと、職員から見て気付いたことがあれば、すぐに提案し、検討するのです。全てが実現する訳ではありませんが、少しでも利用しやすいように、と様々なこと

が話し合われ、実行されているのです。ですから、学外の利用者が多いことも特徴です。それだけ利用者からの評価が高いということもわかります。

「この図書館は動いている。図書館自体が学び、成長している！」と感じます。

しかし、そんな一方で、一部の心無い利用者もいます。使いやすい開放的な雰囲気逆手に取り、他の利用者のことも考えず、お喋り等をして、ただくつろいでいたりします。図書館は「くつろいで」学べるとしても、「くつろぐ」場ではないと思うのです。そこを勘違いした利用者があることを残念に思います。

利用する側もされる側も、常に学ぶ姿勢を忘れない。その姿勢こそが、図書館を真の「学びの場」にするのだと思います。

そんな場で自分も学べるということを、私は誇りに思います。



キーワード

上原さんは、本学大学院「地域産業研究科」を修了し、現在は「法学研究ループアップと更なる自己実現」に向け邁進している。一方、仲原さんは学システムを活用しながら論文テーマに取り組んでいる。理想に向け、

仕事と大学院の両立

法学研究科 法律学専攻2年次 上原 香代子

私が大学院で学ぶことを決心したのは、近年の会計基準や商法改正が、これまでの知識や経験を白紙に戻す勢いに思え、あせりを感じていた頃、情報誌等からわが国の会計基準の改正が、世界標準の会計基準である『国際会計基準』との調和のための改正で、今後もその調整のための改正が続くことを知り、改正基準だけでなく、その基となる『国際会計基準』についての知識の必要性を痛感したからです。幸いにして、当大学院の「地域産業研究科 会計コミュニケーション領域」に入学し、その後一定の成果としての修士論文が認められ2年間の研究生活を修了することが出来ました。その中で、さらに会計基準と深い関係にある商法や税法等に関する法律知識の必要性を感じ、現在は、法学研究科に在籍しております。

大学院では、院生各自の研究テーマに従って、関連する文献やデータの蒐集、分析、考察に大半の時間が費やされますが、その一方において、研究関連に必要な幅広い知識の習得として、一定の単位修得が課せられます。このとき各科目の教授や同じ研究領域の仲間との交流があり、有意義な知識や情報を得ることが出来ます。また、カリキュラムは社会人に十分配慮されたものであり、さらに院生には多くの特典（例えば、共同研究室や資料室、図書館の研究個室の使用、書籍の貸出冊数、貸出期間等）があり、研究に必要な環境が用意されています。このような環境のなか、当初の1年間は、必要な単位修得と、研究テーマの確定、関連文献の蒐集等であっという間に過ぎ去り、院生生活を経験している私でも、改めて「時」の早さに驚いています。この「時」の早さに比例するかのように、人脈も大きく広がり、また、多くの

書籍との出会いにより、専門知識や情報だけでなく、様々な（企業に関連する経営学や経済学、IT等の）知識や情報も得られます。私は、これらにより、社会で遭遇する問題にも的確にかつ柔軟に対処する能力を身につけることができるのではないかと感じています。そして2年次には、指導教授の下、修士論文の作成に全力を挙げて取り組むことになります。10月には、「修士論文中間発表」において研究の内容やその方法を公開し、そのことについての質疑が行われ、この質疑応答により研究の論点が明確になり結論までの方向性が確立され、修士論文の完成に近づくことになります。その後最終試験を経て、2年間の研究成果として「修士論文最終発表」が行われるのです。

大学院で学んで感じたことは、「大学院は、私が携わってきた職業を通じて抱いた疑問の解決だけでなく、その基礎や将来のあり方まで体系的に学習することが出来る場、人脈が広がる場」、そして「激動する現代社会のニーズに合った教育機関」だということです。仕事と大学院の両立は、決して楽なものではありませんが、そこには、多様な考え方を知る楽しみや、疑問を解決する喜びがあり、私にとって大学院で学ぶということは、職業のレベルアップを図ること、さらには自己実現を図ることなのです。

「年を重ねただけで人は老いるのではない。理想を失うとき初めて老いるのである。

Nobody grows old merely by a number of years. We grow old by deserting our ideals. (サミュエル・ウルマン「青春」)」とあるように、理想を持ち続けたいと思います。



集中講義前の自習風景

は「理想」

「研究科」で勉強中。図書館の院生向けの特典を活用しつつ、「職業のレベ部学生」の時のゼミ教員の一言で大学院で学ぶ決心をした。図書館の検索ひた走る二人に登場してもらった。



研究、仲間との交流

地域文化研究科 人間福祉専攻2年次 仲原 都

皆さんは「大学院」と聞くと、なんか特別な場所のようで、私には・・・などと考える人が多いかもしれない。私もそんな考えを持っていた1人で、大学卒業後は就職！と自分の中で決めていた。

大学卒業を目前にしたある日のこと、当時のゼミ担当教員から「沖国大の大学院に人間福祉専攻が開設する」という話があり、その担当教員は「挑戦してみないか？」と私に問いかけた。「えっ、私が・・・なぜ？」頭の中が真っ白になった。そのまま卒業するか、大学院進学か・・・悩みぬいた末、大学院進学を決意したのだった。

昨年4月から大学院進学という道がスタートし、日々の講義やレポート作成、自身の研究に追われながらもなんとか1年を過ごしたように思える。大学院の講義は、学部とは違い少人数のゼミ形式で行われるため中身も充実しているが、それなりの知識も必要とされる。特に前期は自身の勉強不足に対して落ち込む日も多く、「このままではついていけない」と思い、逃げる気持ちでいっぱいだった。そんな私が立ち直り、支えとなったものは、家族・友人・彼氏……そして同じ専攻で学んでいる仲間かもしれない（もちろん先生方も）。人間福祉専攻は、社会福祉学領域と臨床心理学領域の2つの領域からなり、私が在籍している社会福祉学領域は、年齢層が20代から50代と幅広く、職種も様々でなおかつ一人一人が個性的である。ここで、実際にあった出来事があるので紹介する。ある日の講義終了後、元気のなかった私に対して、同じ専攻で学ぶ仲間の1人が「馬のように、とにかく突っ走りなさい！」とアドバイスをくれた。その人は私よりもずっと年上だが、何事に対してもプラス思考である。その言葉は何でもないことかもしれないが、私の前に立ちはだかっていた壁が取り払われ「とにかく、やり遂げよう！」という気持ちが湧いてきた。その言葉があるおかげで今の自分が存在し、その人に対して感謝の気持ちでいっぱいである。

現在、「重症心身障害者の地域生活支援の現状と課題」という卒業論文からの研究テーマを継続して取り組み、研究に欠かすことのできない文献は本学の図書館を利用している。特に先行研究においては、NACSIS-IRという検索システムを利用している。恥ずかしいことに、NACSIS-IRを知ったのは大学院に入ってからのことだった。NACSIS-IRの検索方法は、あるキーワードを入力するとそのキーワードの論文タイトルが表示される。私が調べた限りでは、「重症心身障害」で約70件、「障害者」にもなると400余りもの論文タイトルが出てきた。その中から自分の研究テーマに沿った内容の論文を選択し、論文が本学にない場合は、他大学から取り寄せることもある。その他、資料検索なども本学図書館の検索システムを利用している。

私にとって大学院は、研究する場とともに、同じ専攻で学ぶ仲間同士の交流の場である。今の自分が存在するのも、周囲の「支え」があるからだ。あの時、ゼミ担当教員の一言がなければ……私は今とは異なる道を歩み、今の仲間にも出会うことがなかっただろう（あのゼミ担当教員は、今……私の論文指導教員である）。

誰にでも「道」はあるし、チャンスが訪れる。それは苦しい道のりかもしれない。それを達成した時、自分自身が大きく成長できることを信じて……今は、私に与えられた大学院進学という道を進み、将来へ向けて歩み始めたところである。



日本社会福祉学会出席 於：大阪・2003年10月



図書紹介

『君たちはどう生きるか』

(吉野源三郎 著 岩波書店)

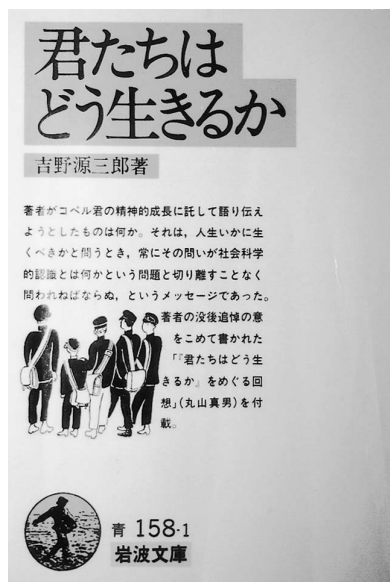
総合文化学部教授 森 田 満 夫

今年の2月初旬に宮崎県の女子高校生が「自衛隊派遣でない方法でイラク支援にあたって」という請願書（5358人分）を小泉首相に出した。請願はまったく読まれず、政府の派遣推進の立場「自衛隊は平和的に貢献する」－をしっかりと教えていないということで、首相自身が学校現場の先生方に異例の苦言を呈した。世論を二分するこのテーマについて「政府の立場こそが正しいもの」として指導せよと。これには疑問を持った。これで、国民主権にふさわしい人間や社会に対する「良識や健全な判断力」（教育基本法8条(政治教育)の立法者意思）を備えさせる学びを創れるのだろうか。高校生の行動は、教科書にもない、世論を二分したこのリアルな社会問題に対して、自分たちの脳味噌で、疑問を持ち、学び、考えたすえのものであった。だからこそ、イラクの人々や自衛隊の人々という他者の事が人間として心配になり、ついに勇気を持ってモラルリッシュに行動したのではないか。なぜ、我々の大人社会は、このようにリアルな社会認識と生きたモラルを結びつけようとする、人間と社会に対する自発的な学びの芽を摘み取ろうとするのか。

こうした疑問を思うとき、私の心に浮かぶ一冊がある。戦前からのロングセラーの吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波書店一本書は、戦前の初版（1937(昭和12)年）を1982(昭和57)年に文庫として収録したもの一である。1937年といえば、わが国でもアジア太平洋戦争に至る日中戦争に国民が巻き込まれていく頃で、ヨーロッパでも以後ムッソリーニやヒットラーが政権をとり、超国家主義や軍国主義が国民一人ひとりの自由や生命に脅威となっていく時代である。そうした暗い時代を憂え、著者は次代を担う少年少女のために、人間の尊厳や自由の大切さを説く子ども向けの〈人生読本〉を書いた。本書は、14歳の主人公コペル君と若いおじさんの身近な対話という構成を持つ。おじさんは日常周辺の出来事の観察や体験についてコペル君自身に注意深く順々に思索を進めることを促し、コペル君自身の人間の生き方・モラル

が社会認識に深く関わることを発見させていく。この学びは、実生活と結びつかない偏狭な国粹主義道徳や天降りの押しつけられた非科学的な神話の国史の当時の教育一般とは違う。例えば、コペル君はある夜中、粉ミルクのことを考える。粉ミルクがオーストラリアでつくられて日本へ、さらにコペル君の口にはいるまでに多くの未知の人々が網の目の関係を取り結ぶ法則があることを発見し、「人間分子の関係、網目の法則」と命名した。おじさんは、コペル君を社会学・経済学の「生産関係」の社会科学的認識へと促し、自然科学の「物質分子の運動法則」と社会科学の「人間分子のそれ」との区別を述べて、コペル君の「法則」を補う。つまり、「人間分子の関係」には「まだまだ本当に人間らしい関係になってい」ない社会的不正義の矛盾がある。同時に「自分の行動を自分で決定する力を持つ」両面性－だから誤りを犯すし、誤りから立ち直る－を倫理的に自覚するのが人間でもある。こうして、社会科学的認識がモラル・倫理的行動に結びつく意味もあることが駄目押しされる形で強調されるのである。

以上のように、本書は本当の学びとはなにかを伝える。学びを疎外する昨今を思うからこそ、本書は読み継がれるべき古典の一つではないか。





学科長が新入生に薦める5冊（種類）の本



法学部法律学科長 井村真己

書名	著者名	発行所
① 論憲の時代	毎日新聞論説室	日本評論社
② 空想法律読本	盛田栄一	メディアファクトリー
③ 社会変動の中の福祉国家	富永健一	中公新書
④ バカの壁	養老孟司	新潮社
⑤ 13歳のハローワーク	村上 龍	幻冬社

法学部地域行政学科長 熊谷久世

書名	著者名	発行所
① 知っておきたい 市民社会における行政と法	園部逸夫	不磨書房
② サイエンス・オブ・ロー 事始め	佐藤義彦	有斐閣
③ NPOと法・行政	山本 啓	ミネルヴァ書房
④ らくらく合格 受かるぞ行政書士2004年度	嶋崎英昭	週間住宅新聞社
⑤ バカの壁	養老孟司	新潮社

経済学部経済学科長 湧上敦夫

書名	著者名	発行所
① 高校生のための経済学入門	小塩隆士	ちくま新書
② スッキリ! 日本経済入門	岩田規久男	日本経済新聞社
③ 経済学者たちの闘い	若田部昌澄	東洋経済新報社
④ 経済史入門	川勝平太	日経文庫
⑤ 平成大停滞と昭和恐慌	田中秀臣 安達誠司	NHKブックス

経済学部地域環境政策学科長 名城 敏

書名	著者名	発行所
① ケータイを持ったサル	正高信男	中央公論社
② リサイクル幻想	武田邦彦	文芸春秋
③ 「リサイクル」汚染列島	武田邦彦	青春出版社
④ ボランティア もうひとつの情報社会	金子郁容	岩波書店
⑤ ソウの時間ネズミの時間 サイズの生物学	本川達雄	中央公論社

産業情報学部企業システム学科長 清村英之

書名	著者名	発行所
① 中世イタリア商人の世界	清水廣一郎	平凡社ライブラリー
② 20世紀 日本の経済人	日本経済新聞社(編)	日経ビジネス人文庫
③ 吉野屋の経済学	安部修仁 伊藤元重	日経ビジネス人文庫
④ 時価会計不況	田中 弘	新潮新書
⑤ 株主総会	奥村 宏	岩波新書

産業情報学部産業情報学科長 大井 肇

書名	著者名	発行所
① 知的複眼思考法	菊谷剛彦	講談社
② 創造の方法学	高根正昭	講談社現代新書
③ 「できる人」はどこがうのか	斎藤 孝	ちくま新書
④ 子どもは判ってくれない	内田 樹	洋泉社
⑤ インターネット完全活用編 大学生のためのレポート・論文術	小笠原喜康	講談社現代新書

総合文化学部日本文化学科長 兼本 敏

書名	著者名	発行所
① 日本語はおもしろい	柴田 武	岩波新書
② 日本文化の歴史	尾藤正英	岩波新書
③ 読書力	斎藤 孝	岩波書店
④ 野火	大岡昇平	新潮文庫
⑤ 古典を読む 徒然草	杉本秀太郎	岩波書店

総合文化学部英米言語文化学科長 新垣 實

書名	著者名	発行所
① なんでも英語やるの	中津僚子	文春文庫
② 日本人はなんで 英語ができないのか	鈴木隆夫	岩波新書
③ ピロメラの歌	米須興文	沖縄タイムス
④ バカの壁	養老孟司	新潮新書
⑤ 哲学講義1~4	P.フルキエ	ちくま学芸文庫

総合文化学部社会文化学科長 江上幹幸

書名	著者名	発行所
① ナマコの眼	鶴見良行	筑摩書房
② 『忘れられた日本人』を読む	綱野善彦	岩波書店
③ マレー諸島(上)・(下)	アルフレッド・ラッセル・ウォレス (訳)新妻昭夫	ちくま学芸文庫
④ 南からの日本文化(上)(下)	佐々木高明	NHKブックス
⑤ 静かな大地	池澤夏樹	朝日新聞社

総合文化学部人間福祉学科長 保良昌徳

書名	著者名	発行所
① 『「原因」と「結果」の法則』	ジェームス・アレン	サンマーク出版
② 『日本近代科学の歩み』	村上陽一郎	三省堂
③ 『人間の大地』	犬養道子	中央公論社
④ 『健康な人格』	デュアン・シュルツ	川島書店
⑤ 『幸福論』	カール・ヒルティ	岩波書店

資料収集は論文作成の要です！

— NACSIS-IRと研究紀要ポータルを紹介 —



卒業論文や修士論文を書くには、執筆するテーマの研究動向を知らなければならないので、先行論文を読むことが必要です。また、本学図書館にはない資料を取り寄せ閲覧することにより、他の学生に一步先んじることができます。

テーマがはっきりしない場合は、各専門分野の学術雑誌（図書館3階学術雑誌コーナー）や、各大学の論文集である紀要（地下2階書庫2）に掲載されている論文を参考にしてください。テーマが決まったら、NACSIS-IR（以下IR）や研究紀要ポータルを使って、テーマが同じ論文を探しましょう。県内の大学図書館にその論文がなければ、県外の大学図書館から論文のコピーを取り寄せたり、資料を借りることができます。

NACSIS-IR（国立情報学研究所が提供。現在、データベースは39種。）

IRでは、テーマとなる単語やそれに関連する単語で論文検索ができます。IRへは図書館の蔵書・文献検索用パソコンからだけでなく、学内のどのパソコンからでも接続できます。以下に操作手順を紹介します。

- 1 図書館のホームページにアクセスして、「NACSIS-IR（学内用）」をクリックします。
- 2 「NACSIS-IRへの接続 web front 日本語」をクリックします。
- 3 「1 NACSIS-IR」をクリックします。
- 4 各データベース名の左側にチェックボックス（☐）があるので、「20 雑誌記事索引データベース」を選択し、「選択実行」をクリックします（主なデータベースの特徴は次項をご覧ください）。
- 5 「検索条件」に検索語句（5つまで！）を入力して、「検索実行」をクリックします。
- 6 検索結果が表示されるので、詳細情報が見たい結果の左側にあるチェックボックス（☐）を選択し、「チェックしたレコードを詳細表示します」をクリックします。
- 7 各詳細情報が表示されます。NCIDの項目が反転表示されているので、そこをクリックすると番号が表示されます。その番号をもう一度クリックすると、その論文を持っている図書館のリストが表示されるので、県内に所蔵館があるか確認できます。
- 8 検索が終わったら、「終了」をクリックして、「99 ログアウト」をクリックしてください。

NACSIS-IRデータベースの紹介

IRには現在39種のデータベースがあります。その中から、本学の学科と照らし合わせて利用頻度の高いデータベースを紹介します。個々人の研究テーマによって有用なデータベースは変わりますので、IRホームページ（<http://webfront2.nii.ac.jp/>）でリストとその特徴をご確認ください。ただし、データベースには、所蔵館が不明のものや、相互貸借ができない資料も含まれています。（以下IRホームページより抜粋）

・雑誌記事索引データベース（NDLJPI）

我が国の学術雑誌に掲載された論文の標題、著者名、掲載雑誌名、巻号、ページ等を収録した索引データベースです。本データベースは、我が国の主要な学術雑誌約9,000誌を収録対象としていますので、これにより我が国の学術論文の二次情報を検索することができます。

- ・経済学文献索引データベース（KEIZAI）

我が国の経済学関係の雑誌等に掲載された論文の標題、著者名等を収録したデータベースで、経済資料協議会の協力を得て国立情報学研究所が作成しています。本データベースの約1,000誌にのぼる収録対象雑誌は、我が国の経済学関係の主要な学術雑誌を網羅しています。我が国の経済学分野の二次情報を知ることができます。

- ・社会学文献情報データベース（SOCIO）

明治期以降、日本人研究者が発表した、あるいは日本国内で発表された社会学関連の文献（著書、翻訳、雑誌論文、編書論文、AV・マルチメディア資料等）についての書誌情報が収録されています。

- ・科学研究費補助金研究成果概要データベース（KAKEN）

科学研究費補助金研究成果概要データベースは、文部科学省が交付する科学研究費補助金により行われた研究の成果の概要を収録したデータベースです。科学研究費補助金は全ての学問領域にわたって幅広く交付されていますので、本データベースにより、我が国における全分野の最新の研究情報について検索することができます。

研究紀要ポータル（国立情報学研究所が提供。日本の大学・研究機関が発行する紀要の論文検索。）

研究紀要ポータルは論文名や著者名だけでなく、著者の所属、年月日でも検索できます。このサイトへは学外のパソコンからも接続することができます。以下に操作手順を紹介します。

- 1 ブラウザのアドレスバーに「<http://kiyo.nii.ac.jp/>」と打ち込んで「研究紀要ポータル」にアクセスします。
- 2 左側の「すべて」と表示されたセレクトボックスから、検索対象項目を選択します。
- 3 真ん中のボックスに検索語句（各ボックスにひとつ）を入力して「検索」をクリックします。
- 4 検索結果が表示されます。
- 5 各詳細情報の右側にある「所蔵館」をクリックすると、その論文を持っている図書館のリストが表示されるので、県内に所蔵館があるか確認できます。

相互利用のご案内

IRや研究紀要ポータルを使って論文を検索したら、県内にないことを確認し図書館1階カウンターで取り寄せの申込みをしてください。操作方法、検索語句、IRの表示、論文と図書の違い等、質問があればお問い合わせください。

前図書課係員（会計課係員） 富村菊江



文献検索ガイダンス

図書館利用オリエンテーション

平成15年度新入生 図書館利用オリエンテーション実施状況

図書館では、新入生を対象に毎年オリエンテーションを行っている。平成15年度は4月21日から5月14日の間実施した。対象学生は1,409名で、実際に参加したのは、1,284名だった。率にして91%。

オリエンテーションの目的は、図書館に慣れ親しんでいただくこと、且つ資料等も十分に活用できるようにすること等である。図書館利用の全般的な心得について職員が説明し、引き続き各階（地上4階、地下2階）を案内した。現場で施設設備・機器備品の説明、図書資料のさがし方や借用・返却、オンライン検索の使用方法等も説明し



た。最後に、検索から図書にたどりつくまでの行程をオンライン検索（OPAC）で実習した。

平成16年度新入生 図書館利用オリエンテーションの実施について

平成16年度新入生図書館利用オリエンテーションは4月19日（月）から実施予定。基礎演習等の時間を利用して実施するので、必ず参加するように。詳細は、担当教員を通して後日連絡します。

図書館は皆さんを待っている

図書館には蔵書約32万冊（郷土資料、参考図書含）、視聴覚資料7,000点、雑誌約2,200種類、新聞47紙、その他パソコン機器35台、ビデオ25席等を常置している。これらの資料等は皆さんの利用を待っている。在学時代の4年間、図書館を利用し知的好奇心を充たしてほしい。常時、図書館に足を運んでください。

文献検索ガイダンス実施

— 大学院生、学部学生3年次以上対象 —

大学院生と学部学生3年次以上を対象に、図書館で文献検索ガイダンスを実施した。データベースを使って文献・論文を検索する方法を説明した後、検索実習を行った。大学院生対象のガイダンスは6月に4回実施し52名が参加、学部学生対象のガイダンスは12月に5回実施し93名が参加した。

学部学生対象のガイダンスでは、「中学校における不登校」について調べるという設定で、各種データベースの検索結果の違いを紹介した。平成16年度も実施する予定である。

ガイダンス参加者の感想

- 「不登校」「中学校」を、「YAHOO」「OPAC」「Webcat」「IR」「研究紀要ポータル」で検索した。「YAHOO」は膨大なサイトがヒットすること、沖縄大図書館にある資料の検索は「OPAC」、全

国の大学図書館の資料検索は「Webcat」、雑誌の論文検索は「IR」、大学論文の検索は「研究紀要ポータル」ですることがわかった。この検索でデータベースが目的に応じて利用できることを理解した。

- 「IR」や「研究紀要ポータル」で検索した論文が県内の図書館にない場合は、図書館1階カウンターで資料取寄せの申込みができることがわかった。
- 来年の卒論に向け、卒論テーマの先行研究論文を集める方法を知るために参加した。AVホールで知識と理屈を学び、その後、パソコンを使った実習があったので、わからないこともすぐに聞くことができた。ガイダンスで得た知識・技能を最大限に生かし、内容の深い論文を目指したい。

最優秀賞・優秀賞各1点、佳作3点決まる — 平成15年度 論文・エッセイ —

図書館主催の「平成15年度論文・エッセイコンテスト」は、本学学生の日頃の研究及び読書活動の向上を図ることを目的として平成元年度から実施している。15回目を迎えた今年は、8点の応募があった。

選考は12月12日（金）の第2回図書委員会で行われ、最優秀賞に総合文化学部日本文化学科3年次・伊佐常利さんの「放送が禁止された歌」が決まった。最優秀賞が出るのは4年ぶりである。

受賞作は、図書館で見つけた森達也著『放送禁止歌』を読むことにより、放送禁止の歌の存在を知ると同時に、放送局が放送するのにふさわしくない歌を独自で選定することに疑問を感じ、分析・調査等を実施した内容の論文である。稲福図書館長は「レベルの高い応募作品が多かったように感じました。いろいろなタイプの論文、エッセイがあります。審査にあたって毎回そうですが、同じ土俵で評価するのは、審査員の先生方の一様のご苦労だと思います。そのような中で今回、最優秀賞がでたことはうれしいことです」と、審査の苦労や喜びを語った。

優秀賞には同じ日本文化学科1年次・小野智子さんの「『夏の花』—平和への祈りの根付き」が選ばれた。小野さんの作品は、原民喜著『夏の花』を通し、原爆のむごさ、悲惨さを訴え、二度と再び同じ悲劇が繰り返されぬよう願った反戦エッセイである。その他に佳作3点も選考された。

最優秀賞

◎総合文化学部日本文化学科3年次 伊佐 常利
「放送が禁止された歌」

優秀賞

◎総合文化学部日本文化学科1年次 小野 智子
「『夏の花』—平和への祈りの根付き」

佳 作

◎法学部法学科4年次 ナカムラ ヒロユ
仲村 広子
「涙」

◎総合文化学部日本文化学科1年次 ヨナミネ リサ
與那嶺 律沙
「生きるということ」

◎地域文化研究科南島文化専攻1年次 ヒライ メアリ
平井 芽阿里
「宮古を想ふ日々」

※年次は受賞時

表彰式開催

論文・エッセイコンテストの表彰式が12月19日（金）午後零時10分から図書館会議室で開催された。

新川宣安課長から経過説明が行われ、稲福日出夫館長が賞状と副賞を受賞者一人ひとりに授与した。引き続き稲福館長、図書委員の先生の講評が行われた。受賞者は図書委員の先生方から祝福をうけ「感激しています」、「受賞を機に更に頑張ります」と喜びを語った。

伊佐常利さんは「最優秀賞という素晴らしい賞をいただき、大変うれしく思います。この論文は、夏からゼミで取り組んできた課題をまとめたものです。文献調査やアンケート調査など、ゼミでのグループ調査をまとめた部分もありますので、今回の最優秀賞はゼミの代表として受賞したいと思います。この賞を機に文章力や構成力を高め、卒業論文に活かしていければと思います」と喜びを語った。



稲福館長の講評

「放送が禁止された歌」（伊佐常利）—

冒頭部分から、読者を引きずり込む力強さがある作品である。背景となる社会情勢もきちんと捉え、冷静に分析している。このようなテーマはややもすれば感情的になってしまいがちであるが、この作品にはそのようなところがない。品格のある文体に好感をもった。「『夏の花』—平和への祈りの根付き」（小野智子）—

この作品を読んでいて、30数年前の大学時代に読んだリルケの作品を思い出した。読後感であるが、小野さんはこのような読書感想といったものを相当に書き込んでいるという印象を持った。一節から七節までまとめる手法は手際良い。だらだらと感想を綴るのではなく、読者の呼吸に呼応するような作品である。



最優秀賞

放送が禁止された歌

総合文化学部日本文化学科3年次 伊 佐 常 利

（年次は受賞時）

はじめに

8月の始め、私は図書館である本に出会った。『放送禁止歌』というタイトルであった。ルポライターの森達也氏が2000年7月に発表した著書であり、そこには、テレビやラジオで「放送が禁止された歌」というものが存在することが記されていた。差別語やवाईせつな言葉を禁止する「放送禁止用語」というものがあるのならば、メロディに言葉をのせる歌謡曲の中にも放送できない歌というものがあるもおかしくはない。しかし、私はこれまで放送できない歌というものがあることすら考えたことがなかった。驚きであると同時に、どのような歌がどのような理由で放送禁止になるのか、また、沖縄県内にも放送禁止歌という制度が存在するのか、という問題に大変興味を持った。

今回のレポートでは、森達也氏の『放送禁止歌』という本を参考に、これまでの放送禁止歌の歴史をふまえ、沖縄県内の放送メディアにおける歌謡曲規制をめぐる状況を調査し、放送禁止歌制度の課題について考えてみたいと思う。

1. 「放送禁止歌」の定義と歴史

世の中では、「放送禁止歌」という制度はもちろん、言葉そのものもほとんど認識されていないだろう。森達也氏によると、放送禁止歌とはさまざまな理由で、テレビやラジオの放送メディアにおいて放送することを規制された歌であると定義される。「表現の自由」が基本的人権として保障されている日本では、法律によって歌謡曲の放送が禁止されることはない。放送禁止歌とはあくまでも、放送団体の自主規制による決定であり、放送局が独自の判断で放送するのにふさわしくないと判断した歌のことを指しているのである。なお、放送禁止歌という用語は、正式には「要注意歌謡」と言い、日本民間放送連盟（民放連）が「要注意歌謡曲一覧表」を作成、各放送局に配布していたという。

放送禁止（または放送規制）の決定は、歌詞とメロディによって総合的に判断される。歌詞・メロディとも一切放送禁止の歌をAランク、メロディは使用して良いが歌詞は放送してはいけない歌をBランク、不適当な箇所を削除または修正すれば使用が許される歌をCランクと3つの程度が設定されている。放送禁止歌リストが盛んに作成されていた当時は、Aランクに指定されてしまうと、最低でも5年間はテレビとラジオでの放送が禁止となってしまうため、制作者側にとっては、ほとんど廃盤に等しい状態の処分になっていたと言われている。

要注意歌謡曲指定制度は1959年7月に発足したが民放連による要注意歌謡曲一覧表の作成、配布は1983年に廃止されている。過去に作られていたリストは、その後5年間は指定の効力は持っていたが、1987年に経過期間が満了し、現在では放送禁止歌制度そのものは消滅している。ただし、森達也氏のレポートによると、制度が存在しないにもかかわらず、過去に一度指定を受けた歌は、放送局が問題になることを恐れてか、現在もほとんど放送されることはないという。

2. 放送禁止歌の種類

2.1 わいせつな歌

では、具体的に放送禁止歌とはどのような内容の歌謡曲を指すのだろうか。次に、過去に放送禁止歌に指定された歌を、ジャンルごとにいくつか紹介してみよう。

放送禁止指定を受けやすい歌謡曲ジャンルの一つに、「わいせつ表現」を含むものが挙げられる。例えば、畑中葉子が1980年に発売した「後ろから前から」という歌がある。畑中葉子が日活の成人映画に出演していた時期に発売した一連の「お色気歌謡」の中の1曲であり、タイトルからも解るとおり、メロディ全体にただようわいせつなムードと、扇情的な歌詞が一時期問題視されて、放送禁止の処分を受けている¹。

¹ ただし、わいせつ表現に対する規制は、性に対する社会全体の価値観の変化に応じて、放送禁止リストの刷新の際に見直されることがあり、後のリストから「後ろから前から」は削除されている。

北島三郎のデビュー曲の「ブンガチャ節」(星野哲郎作詞・船村徹作曲)もまた放送禁止の扱いを受けている。問題になった歌詞は、「あの娘いい娘だ／こっち向いておくれ／キュキュキュキュ／すねて横向き／なおかわいい」の中の下線の部分であり、一見、他愛のない恋愛の歌であるが、「きゅっ、きゅっ、きゅっ」の擬音部分が、ベッドのきしむ音を連想させるとして問題視され、発売から1週間という短い期間で放送禁止の指定を受けている。

2.2 プロテストソング

1960年代から1970年代にかけて多く発表されたプロテストソングもまた放送禁止の扱いを受けることが多かったと言われている。プロテストソングとは、主に政治的なメッセージを前面に打ち出した楽曲を指し、反政府・反権力・イデオロギー・皇室批判等を内容とする歌謡曲が含まれる。これらのプロテストソングの中で最も有名な放送禁止歌は、高田渡が1968年に発表した「自衛隊に入ろう」(高田渡作詞・ピートシガー作曲)である。「みなさん方のなかに／自衛隊に入りたい人はいませんか／ひとはたあげたいひとはいませんか／自衛隊じゃ人材を求めています／自衛隊に入ろう入ろう入ろう／自衛隊に入ればこの世は天国／男の中の男はみんな／自衛隊に入って花と散る」というように、延々と自衛隊に入ろう、入ろうと連呼する内容となっている。もちろんこの歌は自衛隊への勧誘を真剣に歌ったものではなく、自衛隊を揶揄するシニカルなパロディである。よって、問題部分としては、第一に自衛隊からのクレームが考えられるが、森達也氏のレポートや高田渡のその後のコメントによると、自衛隊からはむしろ(発表当時は)歓迎された歌であったという。放送禁止扱いとなった理由は反対のことであり、この曲のパロディ性を理解できず、歌詞の内容を真に受けて、本当に自衛隊に入隊してしまった人が当時いた、ということであったと伝えられている。そんなこともあってか、高田渡はステージでも「自衛隊に入ろう」を長い間を封印していたと言われて

いる。

フォーククルセダーズが1968年に発表した「イムジン河」(朴世永原詞・松山猛訳詞・高宗漢作曲)という作品も発表当時は放送禁止(発売禁止)の指定を受けている。「イムジン河」は朝鮮半島を舞台にした歌であり、もともとは朝鮮半島で歌われていた歌であった。しかし、その歌詞をエッセイストの松山猛氏翻訳する際に「北の大地から南の空へ／飛びゆく鳥よ／自由の使者よ」と訳したことに対して、北朝鮮から韓国へ亡命する人々の姿を連想させ、さらにその行動を「自由の使者」と表現することで、南側、つまり韓国よりの思想を強く感じるというクレームを受けたとも伝えられている²。なお、フォーククルセダーズはこの「イムジン河」騒動の後に「悲しくてやりきれない」という歌を発表しているが、実はこの曲のタイトルの由来は、「イムジン河」を発売できなかったときのやるせなさからきている、という説もあるという。

2.3 差別歌謡

「差別歌謡」と呼ばれるジャンルも放送禁止の指定を頻繁に受けている。差別歌謡には二つの種類がある。一つは、歌詞の中に差別語が出てくる歌であり、もう一つは、差別問題をテーマにしている歌である。

まず、歌詞の中に差別語が出てくるために放送禁止となった歌を紹介してみよう。高田渡が1971年に発表した「生活の柄」(山之口獭作詞・高田渡作曲)では、歌詞の中にホームレスが登場するのだが、歌の最後の部分で、「秋は／秋からは／浮浪者のままでは眠れない」という歌詞が繰り返されており、路上生活者に対する差別語である「浮浪者」が使用されている、という理由で、近年のテレビやラジオでは歌われなくなったと言われている。なお、差別語については、ニュース番組などでは、それ以外の言葉に言い換えて表現するという手法があるが、歌謡曲については言葉を言い換えて歌うということは難しく、高田渡本人も「ホームレス」と言い換えたら「この歌は意味を全て失う」

² 「イムジン河」が放送禁止(正確には発売禁止)扱いになった理由については、諸説があり、「発売直前に北朝鮮系の朝鮮総連から『歌詞が原詩と違い、正しい意味を伝えていない』といった意見や、『(作者不詳とされていたが)北朝鮮の歌であり、れっきとした作者もいるので、明記するように』とクレームがつき、諸般の事情から発売が中止された」という経緯があったとも伝えられているが(「イムジン河」に朝鮮総連が理解 34年ぶり発売へ『サンケイスポーツ』2002.1.31)、クレームをつけたのは北朝鮮側ではなく、韓国政府からであったという説や、外交問題を考慮して日本政府(内閣調査室)がその発売を禁止するようにレコード会社に要請したという説もある。森達也氏は、これらの説はいずれも信憑性が薄く、「真相は未だに僕にはわからない」と語っている。

とコメントしている。

差別問題をテーマにしているという理由で放送禁止に指定された歌もある。岡林信康の「手紙」（岡林信康作詞・作曲）という歌は、「超Aランク放送禁止歌」に指定されていたと伝えられ、未だにこの楽曲はテレビやラジオで放送されることはないと言われている。「手紙」は、同和問題つまり、「部落差別問題」をテーマにしている。

森達也氏によると、放送局にとって、差別問題は「タブー」として避けられてしまうことが多いという。よって、差別問題をテーマとするという理由で放送が禁止されるのは、差別を不真面目に取り上げたり、助長する内容のものだけではない。その歌が差別問題に対して正面から真剣に取り組もうとするものであっても、差別問題に触れているという理由だけで規制の対象となってしまうのである。岡林信康の「手紙」という歌は、差別に苦しむ女性を主人公にした歌であり、この歌の女性はある男性と婚約するのだが、女性が部落出身であることが男性の親族に知られてしまって、男性の祖父から結婚するなら「お店はゆずらない」と言われてしまう、というストーリーになっている。歌詞の最後は「部落に生まれたそのことのどこが悪い何が違う／暗い手紙になりました／だけど私は書きたかった」というふうに結んであり、決して差別を助長するような歌ではない。それどころか、世の中の矛盾をえぐり出すような重みのある歌である。

森達也氏の取材によると、テレビ局やラジオ局側の言い分では、この「手紙」を放送すると関係団体からクレームを受けるから放送しないのだという。しかし、森氏が部落解放同盟に対して行ったその後の取材によると、同盟側はむしろこの歌に好意的な立場をとっており、実際にこの歌を放送してクレームをつけたことはないということが明らかになっている。この取材が正しいとすれば、部落差別問題をテーマにした歌が規制される理由は単にこの歌が（その内容とは無関係に）差別問題に触れているからということになる。「手紙」は現在もテレビやラジオではほとんど放送されることはない。

3. 考察 ～沖縄県内の放送禁止歌制度とその課題

テレビやラジオではこれまでさまざまな理由で数多くの歌を放送禁止扱いにしてきた。森達也氏によると、過去の放送禁止歌制度の効力は根強く存続しており、放送関係者を縛り付けているという。私たちがふだん耳にする歌は、テレビ局やラジオ局の「検閲」をかいくぐって、ようやく届けられたものにすぎないのである。

私が生活している沖縄にもいくつかの放送局がある。沖縄県内の放送メディアではどのように歌の規制を行っているのだろうか。以下、沖縄県内の放送禁止歌制度の現状を調査し、その課題について考えてみたい。

3.1 県内放送メディアへのアンケート調査

沖縄県内の放送メディアにおける放送禁止歌制度の現状を知るため、10月初旬に、アンケート用紙を県内のテレビ局とラジオ局の全10社に発送した³。回答は全5社からあった。その結果を紹介すると、まず「放送前に歌詞のチェックを行っているかどうか」という質問については、1社をのぞいて、4社とも、必ず行っている、という回答であった⁴。

次にこの4社に対して、「どのような歌が規制されるか」という質問をしたところ、わいせつな歌、差別語を含む歌、差別問題をテーマとする歌、プロテストソングという選択肢のほぼ全てに○（または△）がつけられる結果となった。

3つ目の質問では、「誰がどのように放送するしないを決めているのか」という質問を行った。4社ともに、「番組の制作担当者」に○がつけられており、うち1社は「制作部局の責任者」、1社は「判断ができない場合は審査部の判断を仰ぐ」という追記もあった。いずれにせよ、放送するか、しないか、という判断は放送局内部で行われているようである。

3.2 放送禁止歌制度の課題

以上のアンケート結果をふまえて、放送禁止歌制度の問題点と課題を考えてみよう。まず「放送禁止」という制度の必要性について考えてみると、

³ テレビ局(NHK沖縄放送局、沖縄テレビ放送、琉球朝日放送、琉球放送)、ラジオ局(NHK沖縄放送局、琉球放送、ラジオ沖縄、エフエム沖縄、FMたまん、FMちゃんぶらー)

⁴ 「行っていない」と回答した1社は、地域FMであり、所有している音源に限りがあることから、放送禁止扱いになるような楽曲は含まれていないと判断しているという回答であった。

歌というものは、メロディを伴う表現作品であるから、わいせつな歌詞や差別語が含まれる歌詞であっても、メロディがおもしろければ、子どもが何も考えずに口ずさんでしまうという問題もでてくるだろう。例えば、小さい女の子が「後ろから前からどうぞ～」と歌うのはおかしい風景であり、子どもが差別語を知らず知らずに覚えてしまう、というのも問題がある。テレビ局やラジオ局は「公共の電波」と言われることがあるが、品のない歌詞や誰かを傷つけたりするような言葉が含まれる歌を不用意に垂れ流しすることは問題であるとも考えられる。

とはいえ、現在の放送禁止制度に全く問題がないわけではない。世の中には問題のある歌というものが存在するかもしれないが、その放送の可否を放送局側が決定するという部分がまずひっかかってくる。仮に、問題があるとしても、それは、歌っている本人が責任をとればいいことである。第一、プロテストソングや差別問題をテーマにした歌は、制作者側にそれなりに覚悟があるからこそ発表しようと考えたはずである。その歌を放送して、放送局にクレームがきたとしても、「歌い手と話し合ってください」と言えばよいのではないか。曖昧な基準と理由で放送が禁止されるよりも、歌手にとってはクレームがあったとしても、そのクレームを丸投げされるほうがよほどましなのではないか。

しかも、ある歌の内容が、わいせつか否か、良いか悪いか、という判断には個人差というものがあるはずである。現在の沖縄県内の放送局のように、番組担当者を中心として放送局側の人間だけが判断して放送するか、しないかを判断するというのは、「報道」の責務を担うラジオ局やテレビ局にとって正しいことなのだろうか。仮に放送を規制しなければいけない楽曲があるとしても、その判断を放送局側だけが行うならば、そうした対応は視聴者の立場にも歌手の立場にも立っていないと私は考える。

近年、マスメディアの「情報操作」に関する問題が取り上げられることが増えている。何らかの表現行為や情報を放送しないという決定は、放送メディアが持つ責務を考えるならば、重大な決断でなければならない。ある歌を放送禁止にするか

どうか、という決断も、本来であるならば、多くの議論を重ねた上で決定しなければならない事柄であろう。こうしたことを考えるならば、放送禁止歌制度においても、放送局が独断で判断するという方法は大変危険である。少なくとも視聴者やその歌を制作した歌手やレコード会社の意見を聞き、話し合いの場を設けた上で決断しなければならないはずである。

沖縄県も含めて、現在の放送メディアでは、歌謡曲というものが、放送局の独断で闇に葬り去られていると言っても過言ではない。今回、放送禁止歌の歴史を調べるにあたり、私は過去に放送禁止の指定を受けた歌をレンタルショップや中古レコードショップで購入して聴いてみたが、どれも心を動かされる、とてもいい歌であった。「放送禁止歌には名曲が多い」という言葉もある。こうした名曲が、曖昧な基準、曖昧な判断でメディアから消えていくことは、音楽を愛する一人としてどうしても納得することができない。

おわりに

先日、沖縄を舞台にしたドキュメンタリー番組の中で使用された「満州娘」というタイトルの楽曲が放送禁止扱いになったという記事を目にした。理由は不明だが、おそらくは「満州」という用語が問題になったと考えられる。放送禁止歌は決して過去の問題ではない。

歌をうたうという行為もまた立派な表現行為の一つである。そうした表現行為を私たちに伝えることは、テレビ局やラジオ局が担う社会的責任の一つであろう。仮にテレビ局やラジオ局が表現者のメッセージを規制する必要があるとしても、そこには慎重な判断と大きな決断がなければならないと私は考えている。

今回の小論が、放送禁止歌の存在を多くの人に知ってもらい、その問題について考えるきっかけとなってくれば、と私は願っている。(2003.11.4)

参考文献

森 達也著

『放送禁止歌』解放出版社, 2000

橋本 健午著

『有害図書と青少年問題—大人のオモチャだった“青少年”』明石書店, 2002



優 秀 賞

『夏の花』— 平和への祈りの根付き

総合文化学部日本文化学科1年次 小 野 智 子

（年次は受賞時）

一

二

原民喜^{はらたみ き}の『夏の花』は有名な原爆小説の一つである。1945年8月6日の原爆投下直後に書き出した記録ノートから書き起こした、いわば広島原爆の記録小説だ。『夏の花』は記録小説ではあるが、原民喜は一種冷静ともとれるほど正確な描写で、原爆投下直後の広島の様子を写し取っている。何気ない人々とのやりとり、情景、被災者たちの姿。街をさまよい歩く原民喜の視線が乗り移ってくる錯覚を感じるほどである。

『夏の花』は主人公の亡き妻への墓参りから始まる。「8月15日は妻にとって初盆にあたるのだが、それまでこのふるさとの街が無事かどうか疑わしかった」と書かれた予感が皮肉にも的中することになる。（8月15日の妻の初盆に終戦となったことにも、何か更なる運命の皮肉が感じられる。）

『夏の花』は、死者への鎮魂をこめたタイトルであるというのが一般的な説であるが、そこには「広島の復活」という言葉も見えてくるのである。ジョン・ハーシー著『ヒロシマ』の中にある被爆者佐々木とし子さんの証言にはこうある。

「雑草はすでに灰燼をかくし、死都の骸骨の間に野の花が咲き乱れている。爆弾は植物の地下の組織には手を触れなかったばかりか、そこに刺激をあたえたのだ。（中略）まるで、この草の種子がひと車、爆弾と一緒に落ちたかとさえ思われる」

ものの一月もしないうちに、新たな生命が広島に地に芽吹いたのである。草木が二度と生えないのではないと言われていた広島に、自然は復活したのである。それは「生命の復活・再生」を意味し、広島復興の幕開けの合図になる。

『夏の花』のタイトルは、原民喜が被爆前に妻の墓参りに訪れる際に買った黄色い夏の花という、原爆以前の平和な広島を象徴したものである。このタイトルには死者への鎮魂と、平和への祈りが込められているのだ。

原民喜は『夏の花』三部作の『廃墟から』、『壊滅の序曲』やその後の小説に一つも原爆投下に対する明確な怒りは書いていない。彼はむしろそのことを嘆いていた。そして二度と同じ悲劇が繰り返されぬことを祈った。しかし、『夏の花』に唯一怒りをのぞかせている。

「水際に蹲っていた一人の兵士が、「お湯をのましてくれ」と頼むので、私は彼を自分の肩に依り掛かしてやりながら、歩いて行った。苦しげに、彼はよろよろと砂の上を進んでいたが、ふと、「死んだほうがましさ」と吐き棄てるように呟いた。私も暗然として肯き、言葉は出なかった。やりきれない憤りが、この時我々を無言で結びつけているようであった」

原爆投下は、戦争終結をもたらすために膨大な数の日本人を殺さねばならず、広島と長崎はそこにもろもろの活動と人口が集中されていたために目標として選ばれたと言われている。

〈やりきれない憤り〉と広島の一市民である原民喜はそう書いている。彼は原爆を何か〈天命〉のようにも感じていたが、これは唯一にして最後の原民喜の〈怒り〉である。それは、やはり〈怒り〉よりも〈嘆き〉が彼の中には強かったためであらう。

三

「今、ふと己れが生きていることと、その意味が、はっと私を弾いた。このことを書き残さねばならない、と私は心に呟いた」

原爆直前まで自殺を決意していた、つまり一番死に近かったはずの原民喜は自分が生き残ったことに天命を感じ、このことを書き残す決意にいたる。この小説は原爆被災者の証言の一つに過ぎないかもしれないが、整頓された物語はしかし、決してフィクションではない、生々しい現実感を私たちに突きつけてくる。原民喜はこのことを書き

のこすことを決意した時から、全ての出来事を克明に記憶と心に刻み続けたのだ。

その集大成が『夏の花』という小説を生み出したのである。

また原民喜は自分が生き残ったことに天命を感じたのと同じくして、「ふと、私はあの原子爆弾の一撃からこの地上に新しく墜落して来た人間のような気持ちがするのであった」（『廃墟から』）と記している。原爆によって変わり果てた広島は、原民喜には異国に感じられたのであろう。そして「広島之死」は、原民喜自身の死も意味したのだ。広島が無惨な光景は、彼を生まれたての赤子のように大いに戸惑わせた。その感覚を、原民喜は上の一文に表現したのである。

そして戦前と戦後の原民喜の作品の比較をしてみれば、この一文に納得できる。

戦前の作品はほとんどが、幻想的な『死と夢』に彩られたものばかりであった。けれども、原子爆弾によって原民喜を構成していた幻想の世界は打ち砕かれた。戦後の作品はほとんどが「原爆」に引き戻され、縛り付けられたものが多い。中には童話も書いていたが、その時の彼を支配していたのはやはり「原爆」だったのである。

原民喜は、「今、ふと己が生きていることと～」と「ふと、私はあの～」の二文のどちらにも「ふと」という言葉を使用している。感受性が強く繊細な気質だった原民喜に、インスピレーションがたらぬいたのであろう。「天命を持つ原爆から生まれた人間」は、そうして誕生したのである。

四

「ギラギラノ破片ヤ 灰白色ノ燃エガラガ ヒロビロトシタ パノラマノヨウニ アカクヤケタダレタ ニンゲンノ死体ノキミヨウナリズム スベテアッタコトカ アリエタコトナノカ パット剥ギトッテシマッタ アトノセカイ テンプクシタ電車ノワキノ 馬ノ胴ナンカノ フクラミカタハ ブスブストケムル電線ノニオイ」

この詩は『夏の花』内に書かれていた詩である。この詩は原爆によって《精密巧緻な方法で実現された新地獄》をカタカナ文字の無情観によって描いている。この詩は、原爆投下直後の広島でよく見られた光景であった。この光景を見ていた原民喜の驚愕や深い嘆き、未知のものに対する恐怖が息づいた一枚の絵のような詩だ。この詩は「この

辺の印象は、どうも片仮名で描きなぐる方が応わしいようだ」という原民喜の考えからカタカナで書かれている。何故カタカナであるのか、という問いがよく聞かれる。それは、『原爆小景』内に出てくる『永遠のみどり』という詩を見ればおのずと答えが出てくる。

「ヒロシマのデルタに 若葉うづまけ 死と焔の記憶に よき祈よ こもれ とはのみどりを とはのみどりを ヒロシマのデルタに 青葉したたれ」

『原爆小景』に収録されている原爆の詩は、この『永遠のみどり』以外は実は全てカタカナ表記されている。『ギラギラノ破片ヤ』と同じ、原爆後の悲惨な様子を描いた詩たちである。原爆の様子をいかに伝えるか。そのためにはひらがな表記では表現できなかったのである。ひらがなは普段ふつうに使われる、つまり「日常」を意味する。カタカナは字体からしてどこか客観的な、無機質感を持ったつまり「非日常」を意味する。『ギラギラノ破片ヤ』と『永遠のみどり』を見比べてみると、その違いはよく分かる。『永遠のみどり』は平和を祈る詩である。ひらがなで書かれたこの詩は、『ギラギラノ破片ヤ』と違い生きた人間の温度、言葉が感じられる。原民喜は原爆の非情をカタカナの無機質感で、平和への祈りをひらがなの柔軟さで書くことを意図したのである。

五

戦後の原民喜は職を求めて広島から東京へと出ていく。しかし、彼はそこで多くの苦勞をすることとなる。その時の体験が、『魔のひととき』、『遙かな旅』等の一連の作品となっている。

原民喜はリルケの『マルテの手記』に多大な共感を持っていた。ある種のサイケデリックな手記は、原民喜の敏感な感受性に鋭く入り込んだのだろう。戦後の東京での生活を描いた一連の作品は、『マルテの手記』と共通する怯えを伴った強迫観念に似たものがある。

『壊滅の序曲』、『夏の花』、『廃墟から』の三部作には客観的な冷静さが伺えるが、その後の作品は戦後の悲惨な生活が痛々しく伝わってくるようになる。更に亡くなった妻との思い出に原爆前のように回帰している。

原民喜は広島に残っていれば辛い目にあうこともなかった。けれども、小説だけで食べていける

ような状況ではなく、上京して結果的に体調と神経症を悪化させてしまった。

1951年に原民喜は結局、自殺してしまうが彼がこれまで生きてこられたのは奇跡的な気力があつたからではないだろうか。1944年に最愛の妻・貞恵に先立たれてしまい、彼女との思い出を一冊の本にしたら死のうとしていた時、原爆に遭ったのである。本来ならば妻の死と原爆の二つの悲劇ですぐに自殺してもおかしくはなかったであろうが、「このこと(原爆体験)を書き残さねばならない」という使命感により、原民喜は多くの小説を書いたのだ。

そして自殺前年に、原民喜は吉祥寺に移り住む。原民喜の自殺の理由は、断定できる理由が未だにないといってもよい。原爆小説を書くという使命を果たした満足感や、妻との思い出を書ききった満足感により自殺するに至ったというのが今のところ有力な説とされている。原民喜の遺書の文面からも、それを窺わせるものがいくつかある。だが、1950年の朝鮮戦争で原爆の使用が考慮されていたという事実に着目すると、原民喜はこの事実をどう受け止めていたかが問題になる。今までの努力が無に帰することにも等しいことを、原民喜は実感していたということはないだろうか。1951年の原民喜の鉄道自殺というショッキングでセンセーショナルな行為はもしかすると、彼の最後にして最大の「嘆き」だったのではないだろうか。

六

原民喜は、まるで広島の大惨劇に遭うために移ったようなものだ、と感じ続けていた。確かに、彼の支えであり一部でもあった妻が死ななければ原民喜は広島に移り住むこともなかった。何かに導かれるように広島に移り、原爆に遭う。そして天命に目覚めて死者の嘆きのためだけに生き続けることを決意した彼は、死者の怒りや悲しみが結合した「原民喜」という一つの結集した存在だったのであろうか。

現実と幻想が軋み合う世界に否応なく引きずり出されていくのは、夢や幻想を追い求める存在であった原民喜にはどれほどの苦痛であつただろうか。戦争が終わり、東京に移り住むが生活環境の不安は彼を苛み続けた。けれども、原民喜は死者のためにも、妻との思い出を綴るためにも死ぬわ

けにはいかなかった。

そんな彼は、果たして生きていたのだろうか。東京の街を転々とさまよい続け、細々と教師の仕事をしていたという原民喜は、まるで幽霊のような印象を、小説を読んだ人間に与えることがある。小説家の岩佐東一郎氏は、原民喜のことを描いた『生霊』という詩の中で、「自殺する前にすでに死んでいた彼 原民喜」としている。彼の眼に原民喜は、生きているはずなのに実感が薄い幽霊のように写っていたのである。けれども、彼は自分の内からの声(被爆して死んでいった者たちの)と、外からの声(世間の、特に彼を追い詰める者たちの)に必死に抵抗し、生き続けたのである。

「僕は突離された人間だ。還るところを失った人間だ。突離された人間に救いはない。還るところを失った人間に救いはない。では、僕はこれで全部終わったのか。僕のなかにはもう何もないのか。僕は回転しなくてもいいのか。僕は存在しなくてもいいのか。違う。それも違う。僕は僕に飛びついても云う。……僕にはある。僕にはある。僕にはある。僕にはまだ嘆きがあるのだ。僕にはある。僕にはある。僕には一つの嘆きがある。僕にはある。僕にはある。僕には無数の嘆きがある」(『鎮魂歌』)

原爆によって「死」を体験し、生還した原民喜は周囲の目から見れば死んだ人間同然に思えたのであろう。彼は自分の中の死者と向き合い続けたのだから、そう見えても仕方なかったのかもしれない。

だが、彼にも生きた証がある。それはまぎれもなく、『夏の花』を先頭とする小説や詩たちである。彼の想いの全てが集約された作品群は、彼の生きた道程であり確実な証拠なのである。

七

「僕は還るところを失った人間、剥ぎ取られた世界の人間。だが僕は彼等のために祈ることだってできる。僕は祈る。(彼らの死が成長であることを、その愛が持続であることを。彼らが孤独ならぬことを。情欲が眩惑ではなく、狂気であり烈しからぬことを。バランスと夢に恵まれることを。神に見捨てられざることを。彼等の役人が穏やかなることを。花に涙ぐむことを。彼等がよく笑いあう日を。戦争の絶滅を。)」(『鎮魂歌』)

1945年8月6日、8月9日の広島、長崎への原爆投下、そして一九五一年の原民喜の自殺から半世紀が経つ。今世紀も原子爆弾は地球上に存在する。「ノーモアヒロシマ」「ノーモアナガサキ」の声も、どのくらい世界に広がっているのか、理解されているのか危ういところである。そして未だに日本と諸外国、特にアメリカとの「広島・長崎への原爆投下」に対する認識の差が著しく違っている状態である。

原民喜の『夏の花』は、「戦争の記憶の風化」が懸念されている現在も、原爆小説の一つとしてその存在は薄れることなく、私たちに戦争や原爆の恐ろしさ、人間のあり方を問いかけてくる。原民喜は内向的で繊細な人間であった。しかし、原爆という経験によってそれを書き留めようとした彼の決意というのは、どれほどの意志であったであろうか。原爆の後遺症と自身の内面との孤独な闘いを繰り広げながら、原民喜は小説という「祈りの種」を増やし続けたのである。

『夏の花』は読み方によっては記録小説ではあるが、ふとした瞬間に原民喜の意志が突き刺さってくる。それは、戦争への嘆きや怒りではない。堅固な、平和への祈りである。『夏の花』は今後もこの作品を読んだ人々の心に「祈りの種」となりそこに根付くことだろう。

参考文献

西島 有厚著

『原爆は何故投下されたか 日本降伏をめぐる戦略と外交』青木書店、1968

嘉指 信雄著

『哲学の21世紀—ヒロシマからの第一歩』広島平和文化センター、1999

原 民喜著

『夏の花』(集英社文庫)、集英社、1993

原 民喜著、草野 心平ほか監修

『原民喜全集』1～3巻、芳賀書店、1966

原 民喜著

『原民喜戦後全小説』(講談社文芸文庫)、上下巻、講談社、2000

図書館を利用して

岩田ゼミ、6つのテーマ発表

総合文化学部講師 岩田 直子

人間福祉学科社会福祉専攻2年次の3つのゼミ(計105名)は、年に2回、合同ゼミを開催しています。後期の合同ゼミは、岩田ゼミが日頃の成果を披露しました。岩田ゼミでは、「ドメスティックバイオレンス」、「家族に子どもは必要か～子どもの価値について」、「少年非行～地域で家族への地域支援サポートを考える～」 「同姓婚について」、「障害児をもつ家族」、「自閉症児を持つ家族」の6つのテーマごとにグループをつくり調査研究を進めてきたのですが、その成果を発表する方法としてポスター発表をすることにしました。

早速、100人以上の人間が6グループのポスター発表を聞くことができる場所がないか学内中を探しました。条件に合う場があるか心配でしたが、大きな間仕切りと広くてきれいなスペースがある図書館4階ホールという名案が出て、「なるほど、おもしろそう!」と一同、盛り上がりました。図書館職員に伺ったところ、とても親切に対応して下さるばかりでなく、アイディアも下さり、当初の計画よりはるかに素晴らしいものになりました。

合同ゼミ当日、学生達は、ホールの空間を利用できるように間仕切りを移動させたり、ポスターをがびょうで貼ったり、配布資料を確認したりして準備しました。そして本番。まず、学生の代表がAVホールを利用して取り組みの経緯を報告しました。次に、ホールに移動し、発表を聞く側の学生達にも6グループに分かれてもらい、10分間の発表を順々にまわる仕組みをつくり、すべての発表を聞いてもらいました。1週間前の予行練習で感覚をつかんだゼミ生達は、緊張しながらも、それぞれ工夫を凝らして研究成果を伝えていました。発表中は、発表者と聞く側がとても近く、質問もしやすかったのでしょうか、活発なやりとりがあらこちらで見られ、お互いに学び合うことができた有意義な時間になりました。



研究成果を発表中

嘉数津子様から特別寄付金受入

平成15年10月25日、嘉数津子様から図書購入費として百万円の寄附があった。嘉数様は、県内の私学教育に尽力した功績で県功労賞を受賞し、その記念として本学や他の大学へ寄附された。

12月12日の「図書委員会」で用途について審議し、その結果、教育関係の図書を購入することになった。尚、12月29日に本学から嘉数様へ感謝状が贈呈された。

平成15年度
私立大学等研究設備整備費等補助金
(私立大学等研究設備等整備費) 交付決定

文部科学省高等教育局長から、平成16年1月21日付、次の通り交付決定通知があった。補助率は60%。

学 部 学 科	設 備 名	区 分	事業総経費	補 助 額	本学負担額
商経学部 商 学 科	企業活動 環境研究 資料 コレクション	研究設備	9,600,000円	5,760,000円	3,840,000円

※総合文化学部英米言語文化学科申請の特定図書、英米文学研究関連資料コレクションは不採択。

西日本図書館学会から本学図書館表彰

本学図書館は、永年にわたる会員としての貢献に対し、西日本図書館学会から表彰を受けた。西日本図書館学会は1953年11月に創設され、昨年50周年を迎えた。表彰式は2月28日、福岡市総合図書館で行われた。団体会員と個人会員があり、福岡日出夫図書館長は7団体（研究所、大学図書館等）を代表して中川原徳仁西日本図書館学会会長から表彰を受けた。



平成15年度寄贈図書（個人） 寄贈図書が複数ある場合は、任意の一冊を表示させていただきます。

書 名 情 報	寄贈者名	書 名 情 報	寄贈者名
宿題 / 安岡章太郎著 (アラビア語)	アハド・モハメド・モスタファ	宮古古語意義：上代倭語の化石：宮古方言の手引 / 新里博著	新 里 博
梅溪集 / 黄喬著	黄 喬	みなしご「菊と刀」の嘆き：学界の巨頭たちが犯した大過 / 森貞彦著	森 貞 彦
おもろと琉歌の世界：交響する琉球文学 / 嘉手苺千鶴子著	嘉手苺 郁 枝	天然ガス新世紀：持続可能なエネルギーシステムに導く究極の化石燃料 / 森島宏著	森 島 宏
みちのくの海辺の花 / 葛谷孝著	嘉手苺 喜 作	あの日の約束 / 深山篁子著	深 山 篁 子
教育・図書 / 日本建築学会編	笠 卷 正 弘	還暦記念誌：国頭中学校第一期生会 / 還暦記念誌編集委員会編	神 山 吉 光
心理学 / 岩下豊彦著	岩 下 豊 彦	春怨秋思：コリア漢詩鑑賞 / 瀬尾文子著	瀬 尾 文 子
最新ロジスティクス入門 / 菊地康也著	菊 地 康 也	スポーツ選手のための動作法：基礎・実践・研究 / 星野公夫編著；飯嶋正博 [ほか]著	星 野 公 夫
古代の和歌言説 / 吉野樹紀著	吉 野 樹 紀	ゆいまーの世紀へ：人類共生・共存への道 / 西原光雄著	西 原 光 雄
JAL123便は白衛隊が撃墜した / 池田昌昭著	玉 城 隼 人	マッシュ・アーノルド文学研究 / 西原洋子著	西 原 洋 子
豊田喜一郎伝：常に時流に先んずべし / 甲斐謙二画	甲 斐 謙 二	西表方言集 / 前大用安著	前 大 用 安
各地無型アクセント方言の韻律的特徴と教育 / 飯豊毅一、山田泉編	高 橋 俊 三	えはさか?：万病編 / 村津和正編著	村 津 和 正
環境と資源の安全保障47の提言 / 高田邦道、横内憲久編著；日本大学「環境と資源の安全保障」プロジェクトチーム著	高 田 邦 道	バルザックとこたわりフランス：ちょっといい旅 / 柏木隆雄編	大 下 祥 枝
最強のディベート術：会議・商談に活かす実践テクニック / 北岡俊明著	国 吉 祐 作	加奈子メモリアル：愛の一半 / 大湾加奈子、大湾由美子著	大 湾 由 美 子
大学エンrollment・マーケティング：大学EMの4Cスクエア・パラダイム / 今井健、今井光映共著	今 井 光 映	教育臨床研究：沖縄 / 沖縄教育臨床学会 [編]	棚 原 健 次
武蔵八十年のあゆみ / 武蔵80年のあゆみ編集委員会編集	根 津 有 英 会	島の詩：琉歌に魅せられて / 知念仁照著	知 念 仁 照
バルト神学の行程 / 佐々木徹著	佐 々 木 徹	海の生き物100不思議 / 東京大学海洋研究所編	知 名 勝 紀
反戦アンデパンダン詩集：2003年詩人たちは呼びかけ合う / 反戦詩集編集委員会編	佐 川 亜 紀	米国における企業の社会的責任論と法的課題 / 中原俊明著	中 原 俊 明
Cooking note / 座波貞子著	座 波 貞 子	組織の電子コミュニケーション：コンピュータ・コミュニケーションと人間行動 / 中村雅章著	中 村 雅 章
ウェーブ「波」：俳句雑誌 / 三浦加代子、井波未来編	三 浦 加 代 子	三十五年史	町 田 宗 啓
刑法各論 / 三原憲三著	三 原 憲 三	環境経営論の構築 / 長岡正編；長岡正 [ほか] 共著	長 岡 正
再建の理念 / 山上民也著	山 上 博 資	老人福祉論 / 福祉士養成講座編集委員会編集	長 濱 あ き
世界の黒人文学：アフリカ・カリブ・アメリカ / 加藤恒彦、北島義信、山本伸編著	山 本 伸	Der Schadenersatzprozeß / von Edgar Hofmann	田 中 稔
会社支配と社会的利益 / 市川兼三著	市 川 兼 三	ああ三中：回顧録 / 回顧録「ああ三中」編集委員会編	東 江 康 治
経済の停滞と再生：逆転の景気を探る / 篠原三代平編著	篠 原 三 代 平	マイナスもプラスに生きる / 東城百合子著	東 城 百 合 子
日系ブラジル人の定住化と地域社会：群馬県太田・大泉地区を事例として / 小内透、酒井恵真編著	酒 井 恵 真	ガンバレ新一年生：これで安心おかあさん / 内田玲子著	内 田 玲 子
近代日本の米穀市場：国内自由流通期とその前後 / 小岩信竹著	小 岩 信 竹	21世紀初頭の医療と介護：幻想の「抜本改革」を超えて / 二木立著	樋 口 美 智 子
イタイイタイ病の記憶：カドミウム中毒の過去・現在・未来 / 松波淳一著	松 波 淳 一	知っておきたい戦争の歴史：日本占領下インドネシアの教育 / 百瀬佑子著	百 瀬 佑 子
沖縄企業活性化論：経営理念と人的資源管理の視座 / 上間隆則著	上 間 隆 則	あしなが運動と玉井義臣：歴史社会学的考察 / 副田義也著	副 田 義 也
奉仕の巨師上原清善物語：善意の灯火国境を越えて / 宮野賢吉著	上 原 清 善	悲しむ人たちのなぐさめよ：ハーバート・マデリン・ニコルソン夫妻の生涯 / Herbert V. Nicholson, Margaret Wilke 著；木村寛訳	木 村 寛
A Hundred things Japanese / [edited by Japan Culture Institute]	上 原 盛 毅	脱国家教育：国のための教育から個人のための教育へ / 柳下換 [著]	柳 下 換
シーサーあいランド / SHISA編集委員会著	上 原 静	河台民間信仰源流 / 林国平著	林 国 平
Dreamweaver web design book ver.4J / 土岩幸幸著	上 原 靖	斎藤善博新考：中期「島小学校長」期=の位置 / 廣川和市著	廣 川 和 市
法と経済：効率性と社会的正義とのバランスを求めて / ジェフリー・L・ハリソン著；上田純子訳	上 田 純 子	アジア綿業史論：英領期末インドと民国期中国の綿業を中心として / 澤田貴之著	澤 田 貴 之
イギリス国民のための第一弁論および第二弁論 / ジョン・ミルトン [著]；新井明、野呂有子訳	新 井 明	PC UNIXユーザのためのPostgreSQL完全攻略ガイド：オープンソース時代の最強フリーデータベース / 石井達夫著	當 山 仁 健

夏休み・春休み —高校生への図書館利用サービス開始—

平成15年度から、本学の休業期間中(夏期[8/1~9/30]、春期[3/1~3/31])に限り、高校生への図書館利用サービスを開始した。

図書館は、学生や教職員の利用の他に広く社会に門戸を開放してきた。しかしながら入館者の年齢制限が満19歳以上となっていたために高校生は利用できなかった。平成15年度に、本学の休業期間中は16歳以上の市民も利用できる旨、規定を改正した。これにより高校生の利用も可能となった。因みに、平成15年度の高校生の利用者数は47名であった。

坂出祥伸教授から道教関係法具寄贈される

図書館は、坂出祥伸関西大学教授から道教関係の法具リスト50種余を寄贈された。平成16年3月25日、図書館の多目的ホールに坂出教授をお迎えし、法具寄贈式がおこなわれた。

波平学長は、「資料を保存展示し本学及び地域におけるアジアの宗教文化の研究と教育に活用させていただきます」と感謝の言葉を述べた。

平成15年度 図書館見学・視察一覧

6月6日(金) 本部高等学校生15名/図書館見学
6月12日(木) 久米島高等学校生30名/図書館見学
6月12日(木) 中部商業高等学校生36名/図書館見学
6月16日(月) 辺土名高等学校生30名/図書館見学
6月17日(火) 琉球大学附属中学校生5名(引率含)/資料調査
6月25日(水) 日韓学生交流会30名/図書館見学
6月26日(木) 留学生対象図書館利用ガイダンス
7月1日(火) 琉球大学附属中学校生5名(引率含)/資料調査
7月3日(木) 熊本学園大学 学長坂本正氏他7名/図書館視察
7月8日(火) 宜野座高等学校生100名/図書館見学
7月9日(水) 琉球大学附属中学校生10名(引率含)/資料調査
7月18日(金) 宜野湾高等学校生30名/図書館見学
7月22日(火) 八重山高等学校生4名/図書館見学
7月23日(水) 宮古郷友連合会役員6名/図書館視察
8月2日(土) 陽明高等学校生20名/図書館見学
8月8日(金) 小禄高等学校生20名/図書館見学
8月14日(木) 北山高等学校生30名/図書館見学
8月19日(火) 宜野座高等学校生15名/図書館見学
8月19日(火) カイロ大学文学部日本語学科 助教授マハマド・M・F・モスタファ氏/図書館視察

カイロ大学副学長ら、図書館視察

本学と学術交流協定を締結するため来県した国立カイロ大学のモハメッド・アナス副学長他4名の先生方は、12月15日図書館を視察した。地上4階、地下2階を案内し、新川課長が説明した。モハメッド・アナス副学長らは、床冷房と一般空調を併用した省エネ・低騒音の配慮に感心した様子だった。また、4階AVホールでは、操作方法や利用状況等について質問された。



8月21日(木) 北山高等学校生30名/図書館見学
9月12日(金) 中央学院大学職員5名/図書館視察
10月16日(木) 読谷高等学校PTA30名/図書館見学
10月22日(火) 名護高等学校生150名/図書館見学
10月18日(土) 創立30周年記念国際シンポジウムパネリスト イリノイ大学名誉教授 平恒次氏、静岡県立大学教授 伊豆見元氏、宜野湾市長 伊波洋一氏、韓国翰林大学校翰林科学院日本学研究所所長 池明観氏/図書館視察
10月21日(火) 名護高等学校生107名/図書館見学
10月23日(木) 陽明高等学校生171名/図書館見学
10月28日(火) 陽明高等学校生43名/図書館見学
10月29日(水) 具志川高等学校生94名/図書館見学
10月30日(木) 金沢大学附属図書館 専門図書員 梶尾重明氏/図書館視察
11月17日(月) 韓南大学職員3名/図書館視察
12月15日(月) カイロ大学副学長 モハメッド・アナス氏他4人/図書館視察
12月22日(月) 宜野湾高等学校生150名/図書館見学
1月22日(木) 八重山商工高等学校 教諭 當銘由美氏他2名/図書館視察
1月29日(木) 国立国会図書館国会分館 参考課資料第一係 中川透氏/図書館視察
2月19日(木) 独立行政法人 科学技術振興機構 情報事業本部 情報提供部 西日本支所支所長 原茂樹氏 他1名/図書館視察
3月8日(月) 筑波大学社会科学系教授 菱山謙二氏 他1名/図書館視察
3月11日(木) 高岡短期大学 図書主任 櫻井幸子氏/図書館視察
3月22日(月) 石川市立図書館司書 6名/図書館視察

平成14年度

図 書 館 統 計

図書館資料構成

(H15.3.31現在)

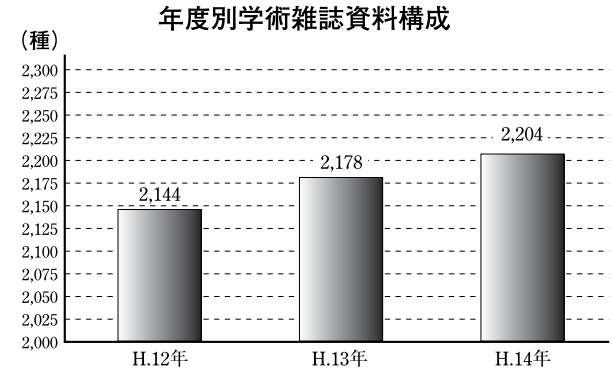
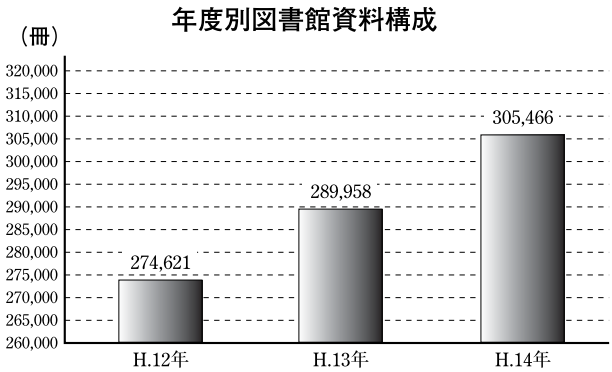
区 分 \ 種 別			計		合 計 (冊)	
			和 書	洋 書		
共通科目	一般教育	総 記	24,216	3,630	27,846	
		人 文 科 学	30,989	5,341	36,330	
		社 会 科 学	7,726	1,128	8,854	
		自 然 科 学	15,443	1,992	17,435	
		計	78,374	12,091	90,465	
	外国語	英 語	2,061	689	2,750	
		独 語	1,886	1,102	2,988	
		仏 語	1,758	1,225	2,983	
		そ の 他	1,139	148	1,287	
		計	6,844	3,164	10,008	
保 健 体 育		1,926	54	1,980		
教 職 科 目		11,991	1,057	13,048		
A	合 計		99,135	16,366	115,501	
専門科目	法 学		34,219	12,019	46,238	
	地 域 行 政		710	150	860	
	経 済 学		28,106	7,709	35,815	
	商 学		21,248	6,483	27,731	
	日 本 文 化		31,817	855	32,672	
	英 米 言 語 文 化		10,137	14,758	24,895	
	社 会 文 化		15,252	4,124	19,376	
	人 間 福 祉		2,198	180	2,378	
B	合 計		143,687	46,278	189,965	
A + B 合 計			242,822	62,644	305,466	
郷 土 資 料			(22,676)	(462)	(23,138)	
参 考 図 書			(25,668)	(4,068)	(29,736)	
学 位 論 文			(91)	(3,268)	(3,359)	
科 研 費 研 究 成 果			(86)	(0)	(86)	
加 除 式 資 料			(80)	(15)	(95)	
視聴覚関係資料	マイクロフィルム		(4,038R) ↓ (11,475冊)	(1,522R) ↓ (1,894冊)	(5,560R) ↓ (13,369冊)	
	マイクロフィッシュ		(533枚) ↓ (464冊)	(7,078枚) ↓ (561冊)	(7,611枚) ↓ (1,025冊)	
	ス ラ イ ド		36	1	37	
	カセットテープ		1,245	130	1,375	
	ビデオテープ		3,630	432	4,062	
	フロッピー・ディスク		485	108	593	
	ピクチャー・カード		12	0	12	
	フラッシュ・カード		9	0	9	
	トランスベアレンシー		9	0	9	
	コンパクト・ディスク		371	10	381	
	レーザー・ディスク		129	4	133	
	C D - R O M		316	44	360	
	レ コ ー ド		0	0	0	
	ピクチャー・チャート		3	0	3	
	電 子 辞 書		15	0	15	
	D V D		123	4	127	
	そ の 他		226	1	227	
	合 計			6,609	734	7,343

() 内は内数を表す。↓は「＝」を示す。
マイクロフィルム・マイクロフィッシュは一般図書へ加算される。

学術雑誌等資料構成

(H15.3.31現在)

区 分		種 別	学 術 雜 誌 数		
			和 書	洋 書	計(種)
共 通 科 目	總 記	571	24	595	
	人 文 科 学	131	31	162	
	社 会 科 学	61	16	77	
	自 然 科 学	75	15	90	
	計	838	86	924	
	英 語	2	0	2	
	独 語	3	2	5	
	仏 語	2	3	5	
	そ の 他	2	0	2	
	計	9	5	14	
	保 健 体 育	19	0	19	
	教 職 科 目	49	9	58	
小 計 (A)	915	100	1,015		
専 門 科 目	法 律	216	63	279	
	地 域 行 政	21	14	35	
	経 済 学	222	66	288	
	商 学	146	41	187	
	日 本 文 化	82	0	82	
	英米言語文化	55	86	141	
	社 会 文 化	79	40	119	
	人 間 福 祉	42	16	58	
小 計 (B)	863	326	1,189		
合 計 (A) + (B)		1,778	426	2,204	



平成14年度

図 書 館 利 用 状 況

1 学科別図書館利用状況

学部・学科	項 目	図 書 貸 出	
		貸 出	人 数
法 学 部	法 学 科	5,539	2,709
	法 律 学 科	819	417
	地 域 行 政 学 科	686	369
商 経 学 部	経 済 学 科	5,231	2,715
	商 学 科	4,612	2,406
文 学 部	国 文 学 科	3,090	1,467
	英 文 学 科	4,906	1,921
	社 会 学 科	4,761	2,125
総 合 文 化 学 部	日 本 文 化 学 科	3,540	1,845
	英米言語文化学科	2,663	1,272
	社 会 文 化 学 科	2,845	1,358
	人 間 福 祉 学 科	3,370	1,732
小 計		42,062	20,336
地 域 文 化 研 究 科	南 島 文 化 専 攻	808	265
	英米言語文化専攻	64	41
地 域 産 業 研 究 科	地 域 産 業 専 攻	558	151
小 計		1,430	457
そ の 他	専 任 教 員	3,298	442
	非 常 勤 教 員 等	436	153
	事 務 職 員 等	951	424
	研 究 生	18	13
	科 目 等 履 修 生 等	583	252
	そ の 他 講 習 生	236	149
	学 外	128	87
小 計		5,650	1,520
合 計		49,142	22,313

2 学外者の図書館利用状況

項 目	合 計
他 大 学 学 生	6,810
他 大 学 研 究 者	172
そ の 他 研 究 者	153
研 究 所 員	16
本 学 卒 業 生	31,572
専 門 学 校 生	3,507
司 書 講 習 ・	
そ の 他 講 習 生 等	2,647
一 般 ・ そ の 他	35,622
合 計	80,499

3 文献複写利用状況

項 目	件 数	枚 数
学 内	5,877	34,557
学 外		
大学図書館	37	302
そ の 他	1,424	14,104
合 計	7,338	48,963

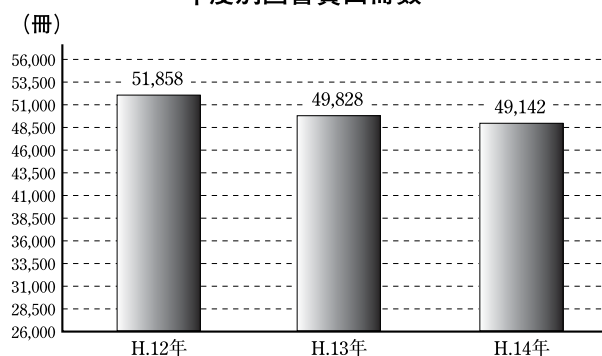
4 参考業務状況（比率）

奉 仕 区 分	学 生	教 職 員	学 外 者	計	(%)
文 献 所 在 調 査	539	51	154	744	29.7%
事 項 調 査	271	25	70	366	14.6%
利 用 指 導	766	37	594	1,397	55.7%
計	1,576	113	818	2,507	
比 率 (%)	62.8%	4.5%	32.6%		

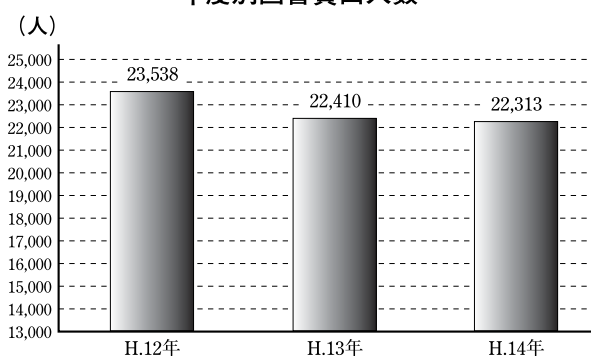
5 開館日数・入館者状況

開 館 日 数	310 日
入 館 者 数	373,946 人

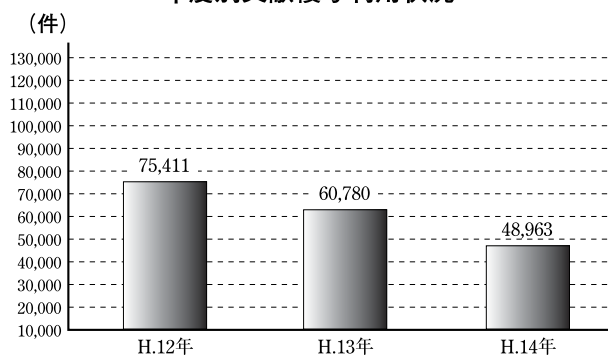
年度別図書貸出冊数



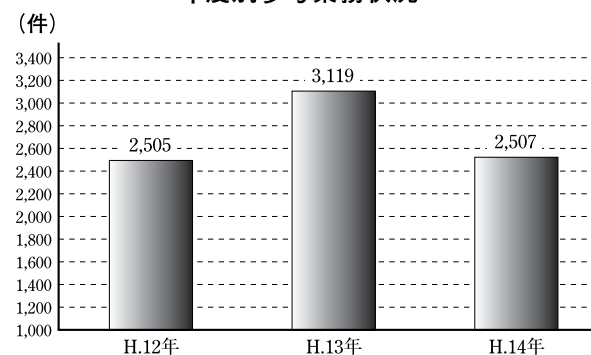
年度別図書貸出人数



年度別文献複写利用状況



年度別参考業務状況



図書館短信

平成15年度図書館員の研修・
研修会等出張の動静

No.	名 称	期 間	場 所	参 加 者
1	2003（平成15）年度第1回私立大学図書館協議会 西地区部会九州地区協議会	2003（平成15）年 4／24（木）	宮崎観光ホテル 当番校：宮崎産業経営大学	館 長：稲 福 日出夫 課 長：新 川 宣 安
2	平成15年度 第54回九州地区大学図書館協議会総会	2003 4／25（金）	ウエルシティ宮崎 当番校：宮崎大学	館 長：稲 福 日出夫 課 長：新 川 宣 安
3	沖縄県図書館協会理事会	5／27（火）	沖縄県立図書館	課 長：新 川 宣 安
4	国立情報学研究所ILL システム講習会	6／12（木） ～13（金）	国立情報学研究所	係 員：富 村 菊 枝
5	私立大学図書館協会 2003年度西地区部会総会	6／20（金）	名城大学	館 長：稲 福 日出夫 課 長：新 川 宣 安 課長補佐：當 銘 弘 道 係 長：中 山 かつら
6	沖縄県大学図書館協議会総会・講演会	7／15（火）	沖縄キリスト教短期大学	館 長：稲 福 日出夫 他図書館員
7	第64回（2003年度） 私立大学図書館協会総会・研究大会	8／20（水） ～21（木）	法政大学	館 長：稲 福 日出夫
8	平成15年度 図書館等職員著作権実務講習会	8／27（水） ～29（金）	岡山大学	係 員：笹 田 章 生
9	平成15年度 大学図書館司書主務者研修会	8／27（水） ～29（金）	京都市「新都ホテル」	係 員：比屋根 奈津子
10	平成15年度 目録システム地域講習会（図書コース）	8／27（水） ～29（金）	鹿児島大学	係 員：比 嘉 綾 子
11	私立大学図書館協会西地区部会九州地区研究会	8／29（金）	ホテルセントラーザ博多	課長補佐：當 銘 弘 道
12	平成15年度 情報ネットワーク担当職員研修会	9／16（火） ～19（金）	国立情報学研究所	係 員：島 袋 彰 係 員：當 山 仁 健
13	沖縄県図書館協会総会	9／16（火）	沖縄県立図書館	館 長：稲 福 日出夫 次 長：山 根 光 正 課 長：新 川 宣 安
14	第19回大学図書館研究集会	9／19（金）	早稲田大学	課 長：新 川 宣 安
15	私立大学図書館協2003年度西地区部会研究会	9／19（金）	就実大学	係 員：富 村 菊 枝
16	平成15年度 九州地区著作権セミナー	9／25（木） ～26（金）	くまもと県民交流館パレス	課 長：新 川 宣 安
17	国立情報学研究所大学図書館等 関連事業説明会	10／2（木）	九州大学	課 長：新 川 宣 安 課長補佐：當 銘 弘 道 係 員：當 山 仁 健
18	沖縄県大学図書館協議会企画委員会	10／16（木）	琉球大学附属図書館	係 員：比屋根 奈津子
19	平成15年度 大学図書館職員講習会	10／11（火） ～14（金）	大阪大学	係 員：島 袋 彰
20	沖縄県図書館協会理事会	11／18（火）	沖縄県立図書館	課 長：新 川 宣 安
21	沖縄県大学図書館協議会講演会	11／28（金）	琉球大学附属図書館	館 長：稲 福 日出夫 他図書館員
22	沖縄県大学図書館協議会企画委員会	2004（平成16）年2／12（木）	琉球大学附属図書館	係 員：比屋根 奈津子
23	沖縄県大学図書館協議会講演会	2／12（木）	琉球大学附属図書館	館 長：稲 福 日出夫 他図書館員
24	西日本図書館学界創立50周年記念行事	2／28（土）	福岡市総合図書館	館 長：稲 福 日出夫



*** 新図書館長 ***
稲福日出夫のプロフィール

平成16年3月31日付けで任期満了と
なった稲福日出夫館長は、引き続き図
書館長として平成16年4月1日付けで
就任した。任期は平成18年3月31日ま
で。新館長の略歴は、次の通り。

1950年9月 平良市生まれ。
1969年3月 普天間高校卒業。
1969年4月 名古屋大学法学部入学。
1975年4月 同志社大学大学院法学研究科修士課程入学。
1982年3月 同大学院博士課程退学。
1995年4月 沖縄国際大学法学部教授。専攻は近代ドイツ
法史学、法思想史。

人 の 動 き

1. 定年退職（平成16年3月31日付）
図書館次長 山 根 光 正
（再任用職員として引き続き本学で勤務）
2. 配置換え（平成16年4月1日付）

職 名	氏 名	前 職 名
図 書 館 次 長	銘 苅 盛 徳	教 務 部 次 長
会 計 課 係 員	富 村 菊 江	図 書 課 係 員
教 務 課 非 常 勤	脇 阪 みどり	図 書 課 非 常 勤

3. 採用（平成16年4月1日付）
図書課係員 友 利 祐 子

図書委員会の動向

1. 平成16年度 図書委員会委員一覧

	学 科 名	氏 名	任 期
1	法律学科	脇阪 明紀	H16.4.1～H18.3.31
2	地域行政学科	佐藤 学	H15.4.1～H17.3.31
3	経済学科	松崎 大介	H16.4.1～H18.3.31
4	地域環境政策学科	源河 葉子	H16.4.1～H18.3.31
5	企業システム学科	天野 敦央	H16.4.1～H17.3.31
6	産業情報学科	平良 直之	H16.4.1～H18.3.31
7	日本文化学科	吉田 肇吾	H15.4.1～H17.3.31
8	英米言語文化学科	西原 幹子	H16.4.1～H18.3.31
9	社会文化学科	上原 静	H16.4.1～H17.3.31
10	人間福祉学科	森田 満夫	H15.4.1～H17.3.31
11	担当教員	山口 真也	H15.4.1～H17.3.31
12	図書館長	稲福日出夫	職責委員
13	図書館次長	銘苅 盛徳	職責委員
14	図書館課長	新川 宣安	職責委員

2. 平成15年度図書委員会開催状況

第1回 平成15年5月30日（金）図書館会議室

報告事項

- (1) 平成15年度図書委員構成について
- (2) 平成14年度学科別等図書費執行状況について
- (3) 平成14年度図書及び学術雑誌資料構成一覧について
- (4) 平成14年度図書館利用状況について
- (5) 平成14年度学外者の図書館利用カード申請者集計について
- (6) 平成14年度指定図書申請状況について
- (7) 平成15年度図書整備計画書提出状況について
- (8) 平成15年度図書館利用オリエンテーション実施状況について
- (9) 平成15年度図書の発注業者について
- (10) 国立情報学研究所紀要ポータルについて
- (11) 私立大学図書館協会西地区部会2003（平成15）年度第1回九州地区協議会及び第54回九州地区大学図書館協議会について
- (12) 館内における救急処置の説明会について

審議事項

- (1) 委員長に事故あるときの職務代行者の選出について

- (2) 平成15年度論文・エッセイ募集について
- (3) 教職課目のバックナンバー購入の予算措置について
- (4) 「学外者の図書館利用内規」の一部改正（案）について
- (5) 研究助成費交付規程改正前購入のコンピュータソフトについて

第2回 平成15年12月12日（金）図書館会議室

報告事項

- (1) 大学院対象図書館利用ガイダンスについて
- (2) 蔵書点検について
- (3) 夏期休暇中における高校生の図書館利用について
- (4) 学部生対象文献検索ガイダンスについて
- (5) 図書館防災訓練について
- (6) 新学科対応予算について
- (7) 嘉数津子氏からの特別寄付金（図書購入費）について
- (8) 平成15年度私立大学教育研究高度化推進特別補助「教育・学習方法等の改善」の採択について
- (9) 平成15年度私立大学等研究設備整備費等補助金の交付内定について

審議事項

- (1) 特別寄付金（図書購入費）による図書購入について
- (2) 平成15年度論文・エッセイの審査について

第3回 平成16年3月15日（月）図書館会議室

報告事項

- (1) 平成15年度私立大学等経常費補助金の内定について
- (2) 図書館での盗難事件発生について
- (3) 平成16年度新入生対象の図書館利用オリエンテーション実施について

審議事項

- (1) 平成16年度私大助成の申請学科について
- (2) 平成16年度図書整備計画について
- (3) 新設学科（地域環境政策学科、産業情報学科）関係の図書売買契約について
- (4) 借用中の研究助成費等による購入図書の所在確認について

編集後記

図書館の3年間を振り返って

前図書館次長 山 根 光 正



沖縄大に事務職員として採用されて30年余、去る3月で定年を迎えた。定年前の3年間は図書館に勤務した。図書館の業務は、外から見ると中に入るとでは大違いだった。私のイメージにある図書館は「知的で静寂に包まれた空間」だった。実際の図書館は知的空間であることには間違いなかったのだが、職員の動きは静寂どころか、「動」そのものだった。図書を配架したり利用者へ対応したりと、常に動いていた。職員間の会話も「いかにすれば、もっとよりよいサービスができるか」に尽きた。3年間を振り返る時、幾つかのことが脳裏をよぎる。

稲福日出夫館長が出勤されると、新川宣安課長と3名で、当面の課題やサービス向上等について毎朝ミーティングを持った。また、月に一回は「課内連絡会」を開き、皆で話し合った。話し合いを持つことで、情報を共有することができ、各自の仕事面にも大いに役立ったと考えている。稲福館長から、本学の休業期間中の高校生の図書館利用について提案があったのもこの席でのことだった。

平成13年5月、急逝された前図書館長嘉手苅千鶴子先生のご母堂様から寄附金が寄せられた。宝玲文庫所蔵資料の複製を設置することになった。図書委員の先生方や日本文化学科の高橋俊三教授、非常勤講師の島袋盛世先生にご協力いただいた。ありがとうございました。

米国で起きた同時多発テロ、その後に炭疽菌関連の「白い粉」騒ぎが発生した。図書館で、米国の雑誌を点検したところ白っぽい粉のようなものを発見した。平成13年10月24日の午後4時30分から10月27日午後2時までの間、臨時閉館した。稲福館長を先頭にして対応にあたったのもつい昨日のことのようである。

平成15年度は学部学生、大学院生を対象に文献検索ガイダンスを実施した。卒業論文や修士論文等に取り組む時、どうしても調査が必要となる。資料検索の方法を図書館職員が説明した。学部学生の場合、3～4年次を対象としたが新年度から全学年を対象にすべきだと考えている。

最後に、前半2年間に取り組んだ『沖縄国際大学三十年史』について。2年1カ月という当初の予定通りの期限内で刊行できたのは特筆に値すると考えている。これも偏に80名余の執筆者、委員会の先生方、編集事務局関係者等々の協力の賜物である。それと稲福館長のリーダーシップも大きかった。

業務以外にも楽しいことは一杯あった。図書館の皆さんでスポーツに興じたこと、そして（大きな声では言えないが）稲福館長、新川課長らと一緒に「フテンマ」でカラオケを合唱したこと等々……。図書館を去るにあたり、職員の親切に感謝します。ありがとうございました。